〈資料紹介〉

大阪市立美術館所蔵「谷村為海煎茶関連資料」の煎茶書について

守屋雅史

はじめに

大阪市立美術館では、京都府八幡市に在住する谷村アイ氏から、煎茶文化に関連した版本類三二四件を平成十九年度に館蔵品として寄贈いただいた。さらに、版本などの複製本九七件、マイクロフィルム焼付製本類十六件、コピー・写真・ノート類など、煎茶文化に関した研究用の資料も備品として、あわせて寄贈いただいた。これらの版本類や研究用の資料は、アイ氏の夫であり、売茶翁高遊外（一六七五～一七六三）の研究者として知られていた故谷村為海（一九〇〇～九一）氏が収集し活用されてきたものである。アイ氏は、谷村文庫などの名称をつけて版本類と研究資料を分散させることなく一箇所で保管・管理・運営・活用してゆくことを希望されていた。当初は、地元の図書館や資料館などに寄贈を打診されたそうだが、こうした版本類・研究資料の価値が充分に理解されずに断られたそうである。その後、すでに版本類の一部を寄託していた大阪市立美術館にも声を掛けてみようということになり、当館にこれらの作品の一括寄贈の打診をされたのである。[1]

大阪市立美術館では、日本経済新聞社とともに平成九年（一九九七）九月から十一月にかけて特別展「文人のあこがれ、清風のこころ　煎茶・美とそのかたち」[2]を開催した。この展覧会は、美術や美術史の立場からは長らく注目されることがなかった煎茶文化をテーマに、出陳作品が四〇〇件を超える本格的な展覧会となった。

趣味や芸能としての煎茶は、江戸初期に中国文化への強いあこがれとともに、中国福建を中心とした華南の地域から長崎などに紹介され、隠元隆琦（一五九二～一六七三）禅師の渡来と黄檗山萬福寺の創建とによって京都の上層文化にも紹介されて、さらに公家社会をはじめ各地の黄檗宗に接する人々の間にも広がっていった。江戸期中頃には、売茶翁高遊外（一六七五～一七六三）を中心に、大典顕常（一七一九～一八〇一）、木村蒹葭堂（一七三六～一八〇二）、大田南畝（一七四九～一八二三、蜀山人）、池大雅（一七二三～七六）、上田秋成（一七三四～一八〇九）などの京都・大坂で活躍した知識人層や富裕な町人層、中下級武士層を中心として、煎茶の趣味は盛んになった。江戸後期には頼山陽（一七八〇～一八三二）・田能村

竹田（一七七七～一八三五）・青木木米（一七六七～一八三三）・山本梅逸（一七八三～一八五六）などの文人と呼ばれる煎茶を好んだ知識人達の相互の交流によって、大分・広島・岡山・福井・名古屋・江戸などにも広がっていった。幕末期には大坂の田中鶴翁（一七八二～一八四八）による花月菴流や京都の小川可進（一七六八～一八五五）による煎茶小川流の二つの宗匠茶がはじまり、煎茶における思想と茶を入れるための所作や儀礼について教え教わる仕組みができ、さらに多くに人々のたしなみとなっていった。明治期になると伊藤博文（一八四一～一九〇九）・木戸孝允（一八三三～七七）・奥蘭田（一八三六～九七）・岩崎弥之助（一八五一～一九〇八）・住友春翠（一八六五～一九二六、十五代吉左衛門、友純）らの元勲や財界・経済界の重鎮などの趣味・趣向と相まって一層隆盛し、日本各地で「茗讌」といわれた大寄せの煎茶会も催された。その大きな中心地が上海貿易の拠点でもあった商都大阪であり、黄檗山萬福寺があって日本文化の伝統が重層化している京都、そして新進の政治の中心地でもあった東京である。

この特別展に際して、煎茶や黄檗文化の研究者である大槻幹郎氏の紹介によって、谷村アイ氏から煎茶書・茗讌図録などの版本を出品いただくことができた。展覧会終了後もこうした版本を大阪市立美術館に寄託いただいて、平常展における煎茶関連の陳列などの際にも活用してきた。こうした版本類は美術作品とはいえないものの、アイ氏からの寄贈に際しては、展示に活用できる江戸期から昭和初期の版本類は館蔵品として、展示には活用できないものの、煎茶文化の研究に貢献する作品は研究用の備品として寄贈いただくこととし、アイ氏と協議調整して前者を「谷村為海煎茶関連資料」、後者を「谷村為海煎茶研究資料」と呼称することとした。そして、平成二十年一月十一日（金）～二月十一日（月・祝）の平常展の一室で代表的な版本類七四件を展覧して寄贈のお披露目をした。

本稿では収集者であった谷村為海氏の紹介、寄贈いただいた全作品のリストと、谷村為海煎茶関連資料における江戸期の煎茶書の書誌的なデータの紹介をまとめ、煎茶文化の研究者の一助としたい。

一、谷村為海氏について

谷村為海氏は、明治三三年（一九〇〇）三月十五日、京都府綴喜郡八幡町（現：京都府八幡市）に生まれ、京都府師範学校本科第二部を卒業ののち、大正八年（一九一九）七月に京都府乙訓郡向陽尋常小学校の訓導（現在の教諭）となった。以後京都府下の尋常小学校・高等小学校・国民学校の訓導を歴任し、あわせて陵墓の研究なども始められた。そして昭和十八年（一九四三）七月、京都市伏見板橋国民学校の訓導を最後に依願退職し、以後自宅にて学究生活をおくる。昭和二五年に京阪神急行電鉄に勤務していたアイ氏と結婚され、二人の子息にも恵まれた。そして、平成三年（一九九一）六月六日享年九一歳で逝去された。

谷村為海氏の研究については、戦前は天皇陵などに関する調査が中心であった。その研究は『御陵墓諸表誌』、『陵墓聖鑑一巻（大和・高市吉野）』という著述に結実している。[3] しかしながら、アメリカ軍の進駐による戦後直後の政情の中では、陵墓研究は充分な内容深化が望めなかった。そのため、谷村氏はしだいに地元の岩清水八幡宮や京都の峯定寺、山口の常栄寺など、西日本各地の社寺や聖徳太子などに関する調査・研究に取り組むこととなった。次男の正通氏

によると、兄の為美氏は古墳の写真撮影に、一方の正通氏は峯定寺をはじめとした寺院や神社の写真撮影に、谷村氏の助手として三脚をもたされて同行させられたとのことである。なお、古墳や陵墓に関する谷村氏が撮影した写真（ガラス乾板）に関しては、平成十九年にアイ氏から堺市博物館に寄贈された。堺市博物館では、世界遺産登録事業に関連して、陵墓の古写真集[4]の出版にも活用されている。

そののち谷村氏は京都市東福寺や宇治市萬福寺の調査を通じて売茶翁高遊外（一六七五～一七六三）の事績と運命的な出会いをしたといわれている。黄檗僧の身分をなげうって一煎茶売りに身を投じ、煎茶中興の祖ともいわれた売茶翁高遊外の思想に触れて共感し、以後は生誕の地佐賀への踏査をはじめとして、売茶翁研究に邁進し、煎茶文化に関する研究者としても大いに活躍することとなった。特に『生誕三百年記念出版　売茶翁集成　―遺品・遺墨・偈語・伝記―』[5]、『現代煎茶道事典』[6]、『売茶翁』[7]の編集や部分執筆などが、谷村氏の売茶翁や煎茶文化に関する代表的な業績であるといえよう。こうした研究のベースとなったのが、大阪市立美術館が寄贈を受けた版本類であり、それらをまとめるための資料類だったのである。

なお、アイ氏によると、谷村氏は古本屋からの案内状が来ると「付き合いを絶つと案内状も来なくなるから。」といって、重複を避けつつも少量ずつ必要な版本類を買い求めておられたそうである。谷村氏の蔵書録ノートには、領収書のほかにもどこからいくらでいつ購入したかまでの克明なメモが残っている。見方を変えればその内容は、昭和後半期の古本を通じた社会経済史的な資料としても充分に活用できるデータといえるであろう。

二、谷村為海煎茶関連資料の江戸期の煎茶書について

本章では、谷村為海煎茶関連資料における江戸期の煎茶書について、その内容を簡略に紹介するとともにそれぞれの代表的な一冊を取り上げて書誌的なデータをまとめ、記述することとしたい。[8]

（一）『梅山種茶譜略』（A／〇〇一～A／〇〇三）

延享五年（一七四八）に執筆した、煎茶中興の祖といわれる売茶翁高遊外（一六七五～一七六三）の著作刊本。京都の梅山（栂尾山の別称）の密弁の求めに応じて執筆したとされ、密弁が跋文も寄せている。茶の渡来や喫茶の歴史を中心に、煎茶に関する理念なども うかがうことができる。売茶翁高遊外は、肥前国蓮池（現佐賀県）に生まれ、本姓を柴山、法名を月海元昭といい、黄檗宗の化霖道龍に師事し禅の修行に励んだ。師の没後五七歳の時還俗して京都に行き、六一歳の時に東山に通仙亭を開いて煎茶による売茶生活をはじめたとされる。客に煎茶という当時の新しい喫茶をすすめながら黄檗禅と脱俗の精神とを問答する彼の周囲には、京都や大坂の文化人達が集うようになり、関西一円の十八世紀の文人文化におけるキーマンの一人となったのである。また、高遊外の没後、梅山禅師と金龍道人が高遊外の偈を集め編纂し出版した『売茶翁偈語』には、高遊外の煎茶の実際の状況とその心情を見て取ることができる。[9]

本書の翻刻は、『東洋文庫二〇六　日本の茶書二』に楢林忠男氏の校注によるものがある。[10]

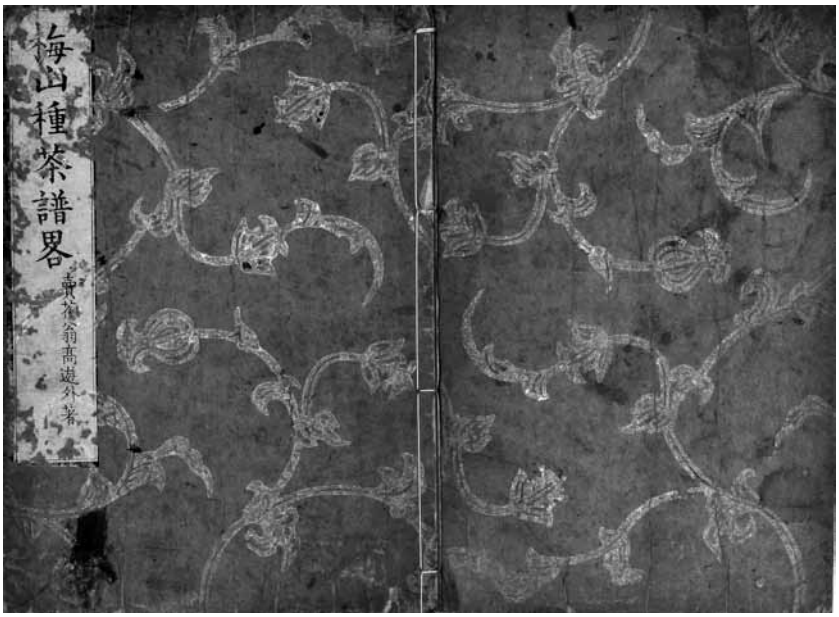
（A／〇〇二）『梅山種茶譜略』の書誌的データ

表紙：丹色、銀箔花唐草模様、題箋：左肩、「梅山種茶譜略

売茶翁高遊外著」、内題：本文初めに「梅山種茶譜畧」、尾題：なし、匡郭：単枠、一九・六cm×一四・三cm、行数：毎半丁、十行無罫
封面：なし、目次：なし
構成・丁付：本文「一」～「四」〔一丁目に印あり〕（四丁）、附録に「五」～「十二」（七丁半）、白紙（半丁）、広告（半丁）、刊記〔印あり〕（半丁）、種茶譜略跋〔印あり〕（一丁）、以上全十四丁
広告：一　梅尾高山寺縁起　一巻／一　明慧上人行状記　三巻／一　明慧上人歌集　一巻／一　梅尾茗園古記　二巻／一　梅尾茗園記抄　一巻／右五部追刻、刊記：「天保九年戊戌二月／高山寺知蔵記／栂尾蔵板／不許翻刻」

【図１】『梅山種茶譜略』（A/002）の刊記

本文匡郭外上部にも木版による細字の注釈があるが、（A／〇〇一）や（A／〇〇三）の二丁目にはある頭注が（A／〇〇二）にはひとつ分欠落しており、三丁目には朱字による訂正（忌→忘）が示されており、（A／〇〇一）では訂正されている。（A／〇〇二）には、表紙が丹色で銀箔花唐草模様があって特別な仕様であることがわかる。刊記にも「日出先照高山之寺」と「栂尾御室」の二印が捺されているので、高山寺の栂尾蔵板における当初の形態に近いものと考えられる。ただし、本の構成としては、刊記の後に跋文がくるのは不自然なので、（A／〇〇一）のように本分の前に位置するのが当初の構成だったと推察できる。（A／〇〇三）は、明治期の再版本で、巻頭に「喫茶」（半丁）・「去　楽生題」（半丁）・富岡鉄斎の序（一丁）が加わって序には明治二六年（一八九三）の年記がついている。**【図１】【図２】**



【図２】『梅山種茶譜略』（A/002）の表紙

（二）『青湾茶話』（A／〇〇四～A／〇〇七）
『煎茶仕用集』（A／〇〇八～A／〇一二）

『青湾茶話』は、大枝流芳によって日本における最初の煎茶書としてまとめられ出版された。明代の煎茶書にならって茶の効用、茶

の種類、茶の保存の仕方、水の選び方、茶の煎じ方、道具の選び方、闘茶の仕方などが解説されている。『青湾茶話』は、当初は七種の雅な遊戯を記述した『雅遊漫録』に付載するために執筆されたもので、書肆が煎茶用の単行本として出版したとされる。

『説郛』に所載された書籍を含めて四九種の中国茶書から茶に関する記述を抜粋し、それぞれの内容を検討して、自らの意見を記述している。中国流の煎茶のあり方に対して部分的には反論を加えており、日本の煎茶のあり方との相違も整理している。奥田昌子氏が指摘するように[11]、江戸中期における新流行の茶のありようを簡潔に知るための書籍を欲していた知識人に与えた影響には大きなものがあったと考えられる。後に『煎茶仕用集』と改題されて再版され、以後様々な書律から出版された。煎茶における風流の考え方や実際の茶の入れ方、道具の選択基準などの点でも、近代になるとやや時代遅れの内容があったものの、大正期にまで刊行されて人気が高かった。明治・大正期にも明代の茶の知識を含めた煎茶のマニュアル本として、上田秋成『清風瑣言』の人気と双璧をなしていたと推測できる。

大枝流芳は、翠川文子氏の研究[12]などによれば、本名を岩田信安といい、「大枝流芳」は版本につけた筆名である。摂津大坂の富家の生まれで、号は漱芳・四川・脩然・釣隠などで、生年は不詳ながら没年は寛延四年（一七五〇）とされる。『雅遊漫録』の都賀庭鐘の序によれば、病のため京都泉谷に隠棲して煎茶を楽しみ、のちに大坂の網島に移り住んで、水が茶に適すとされる青湾で風雅を楽しんだといわれる。香道では御家流の大口含翠保高に師事。御家流に志野流と米川流を加味して大枝流（岩田流）を創設したとされる。香道、有識故事、煎茶に関する多数の著作が多数あって、博覧強記のその知識は驚くべきものがある。

本書の翻刻には、『東洋文庫二〇六　日本の茶書二』に楢林忠男氏の校注によるものがあり、近年では雑誌『煎茶道』にも連載がされていた[13]。

（A／〇〇四）『青湾茶話』の書誌的データ

表紙：〔上巻〕〔下巻〕〔附録〕ともに茶色、題箋：〔上巻〕〔下巻〕〔附録〕ともに左肩、赤褐色で、それぞれ「青湾茶話　上」、「青湾茶話　下」、「青湾茶話　附録」、内題：〔上巻〕本文初めに「青湾茶話巻之上」、〔下巻〕〔附録〕なし、尾題：〔上巻〕〔下巻〕〔附録〕本文末にそれぞれ「青湾茶話巻之上終」、「青湾茶話巻之下終」、「青湾茶話附録終」、匡郭：〔上巻〕単枠、一八・六cm×一三・六cm、〔下巻〕単枠、一八・四cm×一三・八cm、〔附録〕一八・四cm×一三・八cm、行数：〔上巻〕青湾茶話序は八行無罫、目録・本文は十行無罫、採摭諸書・凡例は九行無罫、目録・解説は十行無罫、〔下巻〕目録・解説は十行無罫、〔附録〕目録・闘茶七要具図解説・闘茶新式・闘茶通例・闘茶式・通仙式・玉川式は十行無罫

封面：三枠「大枝流芳先生著」「青湾茶話　附録／闘茶新式」「本朝点茶数寄の道備らざるなく、世にあるところの茶書少からず。近世好事の君子ありて、煎茶の翫ひしばしば行はるといえども、未其書あらず。流芳先生早く此戯に意を用て茶話を著し、又闘茶の式あり、今併せ刻して四方に弘む。博雅の君子に採覧を賜らんことをこひ願がふのみ。」〔印・円印あり〕

目次：〔上巻〕蔵茶、焙茶、洗茶、湯候、淹茶、辯水、選器
附論炭、秤量、盪滌、茶製　附醫茶、茶所、茶事、論客、飲時、
良友、不宜用、不宜近、得趣、〔下巻〕水注、茶鼎、焙鈎、炭
斗　瓢、茶注、包育、火官　羽扇、瓢杓、器局、建城、器具銘、
茶品彙、名水品彙、論水、水軽、〔附録〕闘茶七要具圖、闘茶
新式小引、闘茶通例、闘茶式、通仙式、玉川式
構成・丁付：〔上巻〕表紙裏に封面貼付け、青湾茶話序〔所蔵
印あり〕（一丁）、目録（一丁）、青湾茶話採摭諸書「〇一」～「〇
二」（二丁）、凡例「〇一」～「〇二」（二丁）、本文「〇一」～
「〇二一」（二十一丁）、以上全二十七丁、〔下巻〕目録〔印あり〕
（一丁）、器物図・解説「〇一」～「〇十二」（十二丁）、以上全
十三丁、〔附録〕表紙裏〔印あり〕、目録〔印あり〕（半丁）、白
紙（半丁）、闘茶七要具図「〇一」～「〇四」（四丁）、闘茶七
要具図解説・闘茶新式・闘茶通例・闘茶式・通仙識・玉川式
「〇五」～「十一」〔印あり〕（七丁）、裏表紙の裏に広告・刊記、
以上全十二丁
広告：［附録］「大枝先生編述／先出　貝盡浦の錦／嗣出　雅遊
漫録七冊」、刊記：［附録］「宝暦六年丙子春三月出来／渋川清
右衛門／浪華書坊／大賀惣兵衛／仝梓」

（A／〇〇九）『煎茶仕用集』の書誌的データ
表紙：〔上巻〕〔下巻〕ともに薄青色、題箋：〔上巻〕〔下巻〕と
も左肩、それぞれ「煎茶仕用集　上」、「煎茶仕用集　下」、内題：
〔上巻〕本文初めに「煎茶仕用集巻之上」、〔下巻〕なし、尾題：
〔上巻〕本文末に「煎茶仕用集巻之上終」、〔下巻〕「煎茶仕用集
附録終」、匡郭：〔上巻〕単枠、一八・二cm×一三・六cm、〔下巻〕
単枠、一八・一cm×一三・六cm、行数：〔上巻〕青湾茶話序は
八行無罫、上下巻目録は十一行（後半半丁は十二行）、目録は
十行無罫、採摭諸書・凡例は九行無罫、本文は十行、〔下巻〕
目録・解説は十行無罫、附録は闘茶七要具図解説・闘茶新式・
闘茶通例・闘茶式・通仙識・玉川式ともに十行無罫
封面：三枠「大枝流芳先生著」「煎茶仕用集　闘茶新式」「本朝
点茶数寄の道備らざるなく、世にあるところの茶書少からず。
近世好事の君子ありて、煎茶の翫ひしばしば行はるといえども、
未其書あらず。流芳先生早く此戯に意を用て茶話を著し、又闘
茶の式あり、今併せ刻して四方に弘む。博雅の君子に採覧を賜
らんことをこひ願がふのみ。」
目次：〔上巻〕蔵茶、焙茶、洗茶、湯候、淹茶、辯水、選器
附論炭、秤量、盪滌、茶製　附醫茶、茶所、茶事、論客、飲時、
良友、不宜用、不宜近、得趣、〔下巻〕水注、茶鼎、焙鈎、炭
斗　瓢、茶注、包育、火官　羽扇、瓢杓、器局、建城、器具銘、
茶品彙、名水品彙、論水、水軽重、〔附録〕闘茶七要具圖、闘
茶新式小引、闘茶通例、闘茶式、通仙式、玉川式
構成・丁付：〔上巻〕白紙（半丁）、封面（半丁）、青湾茶話序〔所
蔵印あり〕（一丁）、凡例に「〇一」～「〇二」（二丁）、煎茶仕
用集巻之上下附録目録（一丁）、採摭諸書に「〇一」～「〇二」
（二丁）、煎茶仕用集巻之上目録（一丁）、煎茶仕用集巻之上本
文に「〇一」～「〇二一」（二十一丁）、以上、全二十九丁、〔下
巻〕煎茶仕用集巻之下目録〔所蔵印あり〕（一丁）、器物図・解
説に「〇一」～「〇十二」（十二丁）、煎茶仕用集附録（半丁）、

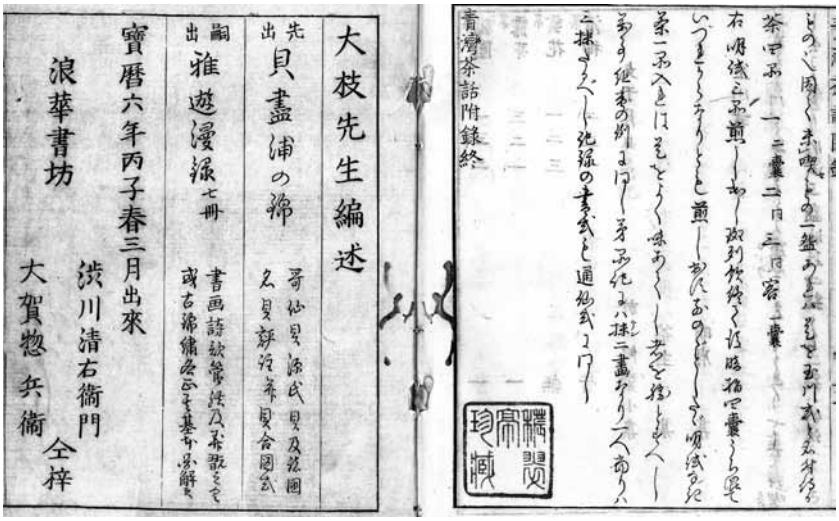
白紙（半丁）、闘茶七要具図に「〇一」～「〇四」（四丁）、闘茶七要具図解説・闘茶新式・闘茶通例・闘茶式・通仙識・玉川式に「〇五」～「十一」（七丁）、広告（四丁）、裏表紙裏に広告、以上全二十九丁

広告：［下巻］「書林　浅井龍章堂蔵版書目／大阪心材橋通南本町北エ入西側／河内屋吉兵衛」、「日本書紀／寛文九年原刻／文政十年再刻／全十五冊」ほか一二九書籍

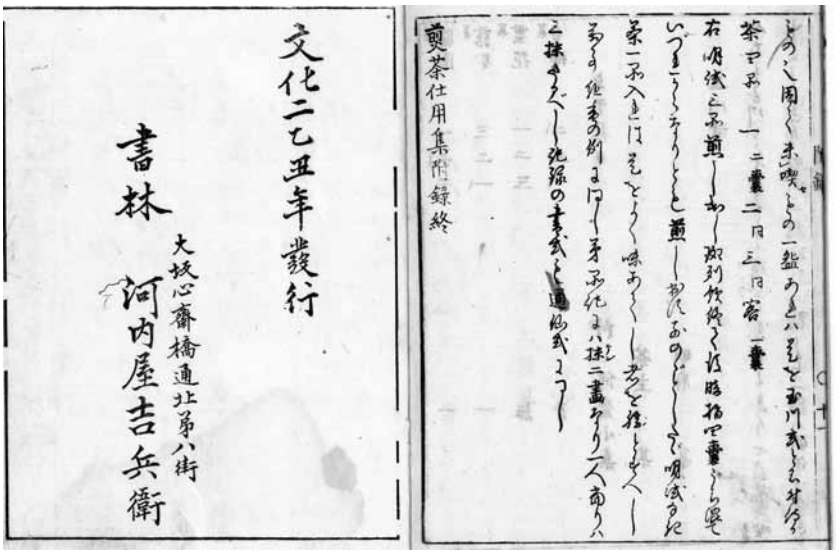
『煎茶仕用集』の江戸期の刊行本は、ほとんど年記が記されずに発行されている。（A／〇〇八）は現状では下巻しか残っていないが、文化二年（一八〇五）の刊行年［刊記：「文化二乙丑年叢行　書林　大坂心斎橋通北第八街　河内屋吉兵衛」］を記している点で重要である。また、封面については、（A／〇〇九）は中央枠を「煎茶仕用集　闘茶新式」と書名を変えるだけであるが、（A／〇一一・A／〇一二）の封面は、中央枠の書名のほかに、左枠を「尾陽書肆　文光堂蔵」と書律名に変えている。さらに、谷村為海煎茶関連資料には含まれていない『煎茶仕用集』の中には、封面の内容が左記に記したものがある。封面右枠の文章からは、改題しているにも関わらず、新たな刊本であるかのような体裁を取っている点が興味深い。

封面：三枠「本朝点茶数寄の道備わらざるなく、世にあるところの茶書少からす。近世好事の君子ありて、煎茶のこと、てならひ、しはしはをこなはる。爰に茶話仕様集闘茶式を併せ刻して四方に弘む。博雅の君子の採覧を賜らんことをこひ願うのみ。」「煎茶仕用集　闘茶新式」「大坂書肆　龍章堂／積玉圃／梓」

それぞれの封面における変化からその前後の関係をにわかに判断することはできないが、このような改題・再販がどのようにして行われたのかを推測することも『青湾茶話』『煎茶仕用集』をめぐる



【図３】『青湾茶話』（A/004）の刊記



【図４】『煎茶仕用集』（A/008）の刊記

今後の課題の一つといえよう。**【図3】【図4】**

(三)『考茶録　(煎茶早指南)』(A／〇一三・A／〇一四)

来歴などは不詳であるが、江戸白鳥台の梅園主人歌口の著述による、煎茶による闘茶のやり方などを記述した手引き書。広間の茶室や茶の湯の道具を用い、図版も使って記されており、煎茶の芸能・儀礼が独自の展開を果たす以前の状況を見て取ることができる。

(A／〇一三)『考茶録　(煎茶早指南)』の書誌的データ

表紙：茶色、題箋：中央、「考茶録　全」、内題：本文初めに「煎茶早指南」、尾題：なし、匡郭：なし、行数：毎半丁、十行無罫(一部七行、八行)

封面：なし、包み袋：「考茶録　全」

目次：迎客式、試茶式、考茶式、披簡式(排簡式)、書記式、色位考式、調度式、一席法令

構成・丁付：近陽處士蘭香序(二丁)、目録(半丁)、白紙(半丁)、本文(十六丁)、後述(一丁)、以上全十九丁半、本文に挿絵、解説図あり、丁番号の記載あり(綴じられている関係で見えなくなっている箇所あり)

広告・刊記：なし

(四)『清風瑣言』(A／〇一五～A／〇二〇)

村瀬栲亭(一七四四～一八一八)の序で始まり、明代の茶書の体裁に準じて、喫茶の歴史、茶の品種、水の選び方、茶の煎じ方、道具の良し悪しなどに関して、医者・国学者・読み本作家でもある上田秋成(一七三四～一八〇九)が著述した煎茶書。中国茶書から数多くの関連した茶の記述を抜粋し、著者の自身の考え方を加えて記している。大枝流芳の『青湾茶話』とならぶ日本における重要な煎茶書で、文人らをはじめ一般の煎茶愛好家への煎茶の浸透において大きな影響を与えた。

上田秋成は大坂曾根崎で私生児として生まれ、四歳の時に堂島の紙油商嶋屋の養子となって上田姓を名乗る。無腸・鶉了・前枝崎人・余斎などの号がある。漢学は都賀庭鐘などに師事し、和歌・国学は賀茂真淵門下の加藤美樹に学び、国学に関する本居宣長との論争は有名である。読み本作家としては、漢籍の素養を生かしながら『雨月物語』のような独自の世界観を創作した。大坂にて市井の医者として活動するものの、やめて京都に移り、儒者である村瀬栲亭らと煎茶三昧の生活を送り、初代初代清水六兵衛(一七三七～九九)に和物の煎茶器を製作させるなどした。『清風瑣言』の執筆も京都時代のものである。

本書の翻刻には、『上田秋成全集』国書刊行会、『日本随筆大成』、『東洋文庫二〇六　日本の茶書二』の楢林忠男氏の校注によるもの、『上田秋成全集』中央公論社などがあり、近年では雑誌『煎茶道』にも連載されている。[14]

(A／〇一五)『清風瑣言』の書誌的データ

表紙：〔上巻〕〔下巻〕ともに薄鼠色、布目表紙、上巻右肩に「上田秋成無腸大人所蔵、浪華花月庵一窗翁閲覧」の貼紙あり、帙：題箋に「清風瑣言　全」、題箋：〔上巻〕〔下巻〕ともに左肩、単枠、それぞれ「清風瑣言　上」「清風瑣言　下」、内題：〔上巻〕

〔下巻〕ともに本文初めに「清風瑣言」、尾題：〔上巻〕〔下巻〕ともに本文末にそれぞれ「清風瑣言上」「清風瑣言下〔印有〕」、匡郭：単枠、〔上巻〕一八・四×一二・六cm、〔下巻〕一八・六×一二・七cm、行数：毎半丁、拷亭序は、七行罫入り、本文・遺事・後序は、八行無罫

封面：なし

目次：〔上巻〕東渡、考古、禀性、天時、制造、地霊、品解、表異、品目、入雑、煎法、分量、煮散、茗戦、湯候〔下巻〕辨水、選器、収貯、久蔵、取火、附餘

構成・丁付：〔上巻〕清風瑣言序・拷亭源之熙撰「叙一〔所蔵印など四印あり〕」～「叙三」（三丁）、本文「上一」～「上二十二」（二十一丁半）、白紙（半丁）、以上全二十五丁、〔下巻〕本文「下一〔所蔵印など四印有〕」～「下二十一」（二十丁半）、白紙（半丁）、器物図「一」～「四」（三丁半）、白紙（半丁）、遺事「遺事一」～「遺事二」（二丁）、後序（一丁）〔二印あり〕、刊記（半丁）、後序と刊記には丁付なし、以上、全二十八丁半、

＊上下巻とも、朱字の書き込みあり

広告：刊記（半丁）の右半分に「陸鴻漸茶経／蔡君謨茶譜　合刻全二冊」のほか七種の書籍と、「茶人家譜　一枚摺」の広告あり、刊記：「寛政六年甲寅仲冬刊行／皇都書肆／鷦鷯惣四郎／小川源兵衛／浅井荘右衛門／中川藤四郎、〔印あり〕」

なお、上巻右肩の貼紙の内容については確証するデータはない。（A／〇一六～A／〇二〇）については、合冊の有無、後序などの配置や広告の内容、刊記の書律名などに相違があるのみで、基本的な記述内容にかかる相違はない。

（五）『煎茶略説』（A／〇二一～A／〇二三）

製茶から花香茶までの前半部分は葉雋『煎茶訣』の和訳であり、次ぎに日本の煎茶で実際に用いている茶器を取りあげて解説している。池五山が序文を北邨春豊が跋文を寄せ、木村蒹葭堂が出版をしている。ほとんどの漢字にひらがなのルビを付したり、内容的にも実務的なものが多く平易な文体であり、一般の人々の煎茶に対する要望に対応するような体裁を取っている。煎茶の一般人への流行をうかがわせる一書といえよう。初期の和物煎茶器にかかる京焼の陶工達の記述にも重要な内容がある。

（A／〇二一）『煎茶略説』の書誌的データ

表紙：白色、右肩に「十五」の記載あり、題箋：左肩、滅失、内題：本文初めに「煎茶畧説」、尾題：なし、匡郭：単枠、一九・一cm×一三・一cm、行数：池五山題は四行無罫、目録・本文は九行罫入りで、下段枠内に「蒹葭堂」の文字あり

封面：「煎茶畧説　楽水居蔵」〔印あり〕

目次：製茶、蔵茶、擇水、潔瓶、候湯、煎茶、淹茶、花香茶、風爐、涼爐、小砂罐、蓋置、爐板、藤床、拭盞、茶鍾、茶盤、香盒　薫物　線香、茶托子、火筋、挾堤、吹筩、羽箒、絹帕、萪藤扇、茶注、茶漏　茶匙、茶焙、茶筴　紙嚢、建水、漉水、滓盂、櫻札、竹杓、烏府　炭　炭撾、堤籃

構成・丁付：表紙裏に封面貼付け、「池五山題」〔劦和勝林寺蔵書の印あり〕（一丁）、目録に「一」～「二」（二丁）、本文に「一」

〜「十六」(十六丁半)、「十六」丁後半に楽水居主人の跋(半丁)、「十七」丁前半に「寛政戊年の秋七月　北邨春豊」の後跋あり〔印あり〕、白紙(半丁)、以上全二十丁

広告・刊記：なし

なお、(A／〇二二)は、「煎茶畧説　兼葭堂蔵」の赤紙の封面が表紙裏に貼られ、本の寸法がやや大きくなっており、ともに年記はないものの(A／〇二一)とは別刷りの書籍である。(A／〇二三)も年記はないものの刊記には「和漢洋書籍発売処／東京帝国大学／京都帝国大学／高等師範学校／第一高等学校／学習院／帝国図書館　御用書肆　発行印刷社／大阪市東区博労町四丁目廿七番邸／青木恒三郎／製本発売所／東京市　日本橋通り壱丁目／青木嵩山堂／仝　大阪市心斎橋筋博労町／青木嵩山堂」とあって、明治期の再刊本であることがわかる。

(六)『自弁茶略』(A／〇二四)

『煎茶早指南』(A／〇二五〜A／〇二八)

『自弁茶略』は、沢田楽水居『煎茶略説』などを参考に、煎茶の歴史、茶の煎じ方、道具立てなどについて、図版を多用して初心者にもわかりやすいように、煎茶の楽しみを平易に解説した入門書である。茶の湯で使用されていた茶器の転用品や、京都・名古屋などの日本産の煎茶器の記述が多い。『煎茶早指南』と改題・再版されて、明治期まで再版されており、平易なために人気があったと考えられる。叙によれば、煎茶好きの嵐翠は兄である瓦礫舎翁を口説いて茶の湯から煎茶に好みを変えさせたが、本書は瓦礫舎翁が実弟の嵐翠に平易な煎茶書の執筆をすすめて、末弟醒阿に上梓させた刊本であり、煎茶に転向したあとの後の瓦礫舎翁の趣向や道具の転用の実態なども記している。

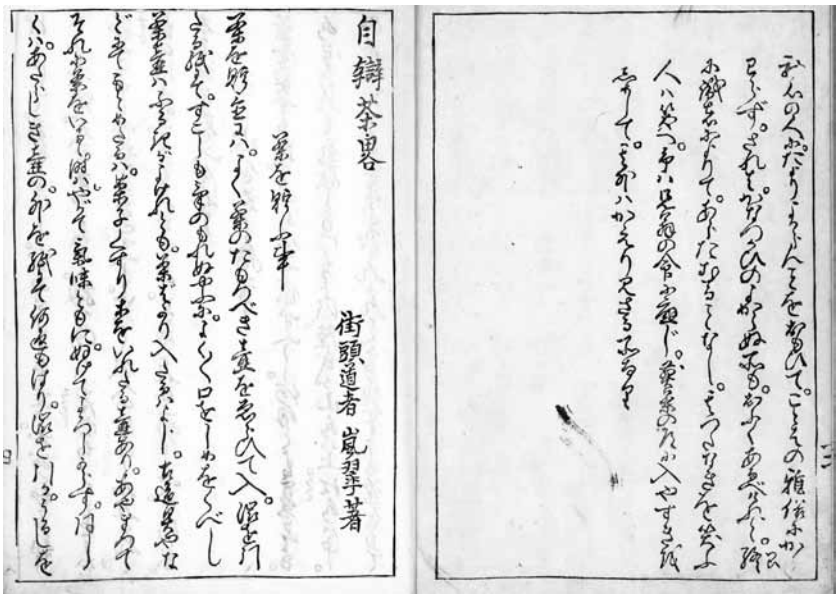
市橋鐸氏や延広真治氏[15]によれば、瓦礫舎は尾張・名古屋の人で、桜天神社別当、霊岳院住職。嵐翠はその弟で、広小路柳薬師別当、正伝寺住職であり、曲亭馬琴(一七六七〜一八四八)の上方紀行『羈旅漫録』の中でも、名古屋での評判の文中に「この兄弟風流の人なり」と記述された人物である。

なぜか元本の『自弁茶略』よりも、改題・再版された『煎茶早指南』の方が書名が通って有名であり、著者名も本文巻頭に記された「街頭道者嵐翠」が取られることはほとんどなく、道具の解説の後に捺された著者の落款の下の印名「柳下亭」からとった「柳下亭嵐翠子」とされることが多い。また、『煎茶早指南』は刊行年を記さない刊記が付されるために、刊行年としては「享和二年壬戌(一八〇二)叙」が参考とされる。これが、『自弁茶略』の刊記による「享和三年癸亥(一八〇三)刊」よりもふるいことから、元本である『自弁茶略』が改題本と誤解されて記述されることもある。さらに、『自弁茶略』には巻頭の内題が存在しているが、『煎茶早指南』ではこの内題部分が欠落しており、版木を削り取っていることがわかる。一方、書籍としての全体の配列や体裁も、叙や凡例のあとに内題と著者名のある本文がはじまり、売茶翁の肖像と道具置付指図の図版となり、個々の道具の解説となって、最後に著書の落款印章が捺されて、広告と刊記となるという『自弁茶略』の方が自然であり、この時代の書籍としては、単枠がある『自弁茶略』の方が、無枠である『煎茶早指南』よりは上等な印象を受ける。**【図5】【図6】**

翻刻は、『名古屋叢書』第十六巻（風俗芸能編 第一）に『自弁茶略』があり、『東洋文庫二〇六　日本の茶書二』に楢林忠男氏の校注による『煎茶早指南』がある。[16]

（A／〇二四）『自弁茶略』の書誌的データ

表紙：茶色、題箋：左肩、「自弁茶略　全」（コピー用紙貼付け）、内題：本文初めに「自弁茶略」、尾題：なし、匡郭：単枠二〇・四cm×一三・七cm、行数：九行無罫



【図５】『自弁茶略』（A/024）の本文巻頭

封面：なし

目次：茶を貯う事、水をゑらぶこと、茶瓶を洗うべき事、湯かげんの事、茶を煎じて熟味をうかがう事、茶を洗う事、花香茶の事、附言、売茶高遊外老翁之像、瓦礫舎茶亭道具置付指図、涼炉并台、丸こんろ、風炉、炉囲、瓢製茶焙、拭盞・柄杓・杓立、急焼又小砂罐、櫻払、茶鐘、挾提・茶匙、漉水并水曹構成・丁付：白紙（一丁）、叙に「一」～「二」〔所蔵印、印あり〕（二丁）、凡例「三」（一丁）、本文に「四」～「十四」（十一丁）、売茶高遊外老翁之像「十五」（半丁）、瓦礫舎茶亭道具置付指図「十五」～「十六」（一丁）、道具解説「十六」～「二十一」〔二十一丁目に印あり〕（六丁）、刊記（半丁）、白紙（半丁）、以上全二十三丁

広告：なし、刊記：三枠「享和癸亥初冬彫」「瓦礫舎蔵」〔印あり〕「製本書肆　片埜東四郎」

享和癸亥初冬彫
瓦礫舎蔵
製本書肆　片埜東四郎

【図６】『自弁茶略』（A/024）の刊記

（A／〇二五）『煎茶早指南』の書誌データ

表紙：緑色、題箋：左肩、「煎茶早指南　全」、内題：なし、尾題：なし、匡郭：なし（四丁・五丁目のみ匡郭あり）、単枠、二〇・三cm×一三・七cm、行数：九行無罫、

封面：三枠「嵐翠子著」「煎茶早指南」「張府書賈　東壁堂叢兌」〔円印あり、印あり〕

目次：売茶高遊外老翁之像、瓦礫舎茶

亭道具置付指図、涼炉并台、丸こんろ、風炉、炉囲、瓢製茶焙、拭盞・柄杓・杓立、急焼又小砂罐、椶払、茶鐘、挾提・茶匙、漉水并水曹、茶を貯う事、水をゑらぶこと、茶瓶を洗うべき事、湯かげんの事、茶を煎じて熟味をうかがう事、茶を洗う事、花香茶の事、附言

構成・丁付：表紙裏に封面貼付け、叙に「一」～「二」〔印あり〕（二丁）、凡例「三」（一丁）、売茶高遊外老翁之像「四」（半丁）、道具置付指図「四」～「十」〔十丁目に印あり〕（六丁半）、本文に「十一」～「二十一」（十一丁）、広告・刊記「目一」～「目六」（五丁半）、白紙（半丁）、以上全二十七丁

広告：「尾陽東璧堂製本畧目録」

刊記：「尾州名古屋本町通七丁目　永樂屋東四郎／江戸日本橋通本銀町二丁目　同　出店／濃州大垣本町　同　出店」

なお、（A／〇二六・A／〇二七）の『煎茶早指南』は、広告と刊記に相違があり、（A／〇二八）も年記はないものの（A／〇二三）の『煎茶略説』と同様な刊記があって、明治期の再版本であることがわかる。

（七）『烹茶樵書　茶寮図賛附刻』（A／〇二九）

本草家の曾占春（曾槃、一七五一～一八三四）による茶書。曾槃は医家として庄内藩に仕えたのち致仕し、江戸学派の田倉藍水に本草を学んだ。国学者の白尾国柱とともに薩摩藩主島津重豪による農書・本草図譜の『成形図説』の編纂も行った。『烹茶樵書』では本文の記述に続いて、江戸の漢詩人の大窪詩仏が「茶寮図賛」を加えている。本書は江戸の文人社会における煎茶の流行を示すとともに、岩間真知子氏の指摘のように[17]、医師・本草学者であり、中国文献の豊富な知識があって考証も確実な曾槃だからこそ、茶の性質などを合理的に論述しつつ、茶の豊かな情趣を詠じた良書を残すことができたと考えられる。

翻刻は、『日本庶民文化史料集成』第十巻数寄に、楢林忠男氏校注のものがある[18]。

（A／〇二九）『烹茶樵書　茶寮図賛／附刻』の書誌的データ

表紙：薄水色、題箋：左肩、「烹茶樵書　茶寮図賛附刻」、内題：〔烹茶樵書〕本文初めに「烹茶樵書」、〔茶寮図賛〕本文初めに「茶寮図賛」、尾題：〔烹茶樵書〕なし、〔茶寮図賛〕なし、匡郭：複枠、一四・八cm×一〇・五cm、行数：九行無罫

封面　〔烹茶樵書〕三枠、右枠は空欄、「烹茶樵書」「曾占春蔵版」、〔茶寮図賛〕三枠、右枠は空欄、「茶寮図賛」「占春蔵版」

目次：〔烹茶樵書〕古今、釋名、性味、擇芽、品解、蔵茶、験水、擇炭、湯候、選器、〔茶寮図賛〕盧相國、沙丞相、雍太保、陶分司、漆雕秘閣、竺秘書、楮參政、平節度、椶團鍊、勝承務、胡負外、竹烏府、般都承、雲屯田、方護軍、霍将軍、金司直、沈水部

構成・丁付：〔烹茶樵書〕封面（半丁）、肖像画・賛（半丁）、序（一丁）、本文（十三丁半）、白紙（半丁）、〔茶寮図賛〕封面（半丁）、肖像画・賛（半丁）、本文（二十一丁）、広告・刊記（半丁）白紙（半丁）、以上全三十九丁

広告：「懐寶年代記両面摺／懐寶道中記右仝」、刊記：「江戸書

鋪　前川彌兵衛梓」

（八）『煎茶式』（A／〇三〇）

文人大名として知られる増山雪斎（正賢、伊勢長島藩五代藩主）が著述した煎茶に関する書籍。茶席における主客の注意事項や善し悪し、煎茶のあとの菜単の例などについて記している。雪斎は木村蒹葭堂の文人サロンのひとりでもあり、「雪斎隠君蔵十三器」と題した煎茶の道具の図版がつく。翻刻は、『日本庶民文化史料集成』第十巻数寄に、楢林忠男氏校注のものがある。[19]

（A／〇三〇）『煎茶式』の書誌的データ

表紙：茶色、題箋：左肩、「□茶□　全」（「煎茶式」と推定）、内題：本文初めに「煎茶式」、尾題：なし、匡郭：単枠は一六・八cm×一二・一cm、行数：九行罫入り、十二丁・十三丁目は六行無罫、封面：三枠「雪齋隠君著」「煎茶式」「尚古斎蔵板」、目次：なし

構成・丁付：表紙裏に封面、本文「一」～「七」（七丁）、雪齋隠君蔵十三器「八」～「十二」（四丁半）、跋文「十二」～「十三」（一丁）〔印あり〕、白紙（半丁）、以上全十三丁

広告・刊記：なし

（九）『茶史』（A／〇三一）

真間人が（人物の詳細は不明）執筆し、豊田甚右衛門が旁訳を付けたとする煎茶書で、新説を著述したので「茶史」と命名したとするが、本文は漢文ながら、日本の地名が散見されるので和書である。茶の効用や器の選択の仕方、煎法や湯加減などについても自らの思うところを平易に簡潔にまとめている。巻末欄外の「照降町」は現在の東京都中央区の日本橋小網町のあたりのことで、豊田甚右衛門はそこにあった茶店の主人と考えられる。

（A／〇三一）『茶史』の書誌的データ

表紙：茶色、題箋：左肩、「茶史」（文字が薄くなっている）、内題：「茶史」、尾題：なし、匡郭：単枠は四・二cm×一〇・一cm、序・茶史題辞は複枠で一四・二cm×一〇・二cm、行数：茶史題辞は七行無罫、序は六行罫入り、本文は八行罫入り、封面：なし

目次：茶効、茶之出、採造、禁奢靡、択器、茶盞、水品、択火、湯候、焙、煎法、賞茶有地有時、賞鑒、択茶舗、購茶有限、禁茶食、茶魔、掌故、尚友

構成・丁付：白紙（半丁）、茶史題辞（一丁）〔印あり〕、序（一丁）〔印あり〕、本文「一」～「十」（九丁半）、跋文「十」後半（半丁）、以上全十三丁

広告・刊記：なし、欄外に「照降町茶店豊田甚右衛門蔵板」と記す

（一〇）『淹茶式』（A／〇三二・A／〇三三）

著者の経歴は不詳であるが、「淹茶新式并煎茶」と題した、淹茶（茶葉に湯を注いで茶液とする方式）と煎茶の入れ方に関する解説書。茶の湯の茶事に模して煎茶の式法を記述している。二つの図版があって、一つは煎茶道具の飾り方、もう一つは、煮付皿と二汁椀、盃

と酒注を載せた長硯蓋、淹茶盆と煮茶（煎茶）盆の上に急尾焼や煎茶碗・仙媒・布巾銚座などを配置し、淹茶の入れ方を図化している。

（A／〇三二）『淹茶式』の書誌的データ

表紙：薄茶色、題箋：左肩、「淹茶式　全」、内題：「淹茶新式兼煎茶」、尾題：なし、匡郭：単枠は一八・八cm×一二・七cm、行数：八行無罫、封面：なし、目次：なし

構成・丁付：序文「一」（一丁）、器物図「二」（一丁）、本文「三」～「六」（四丁）以上全六丁

広告・刊記：なし

（十一）『石山齋茶具図譜』、『竹田荘泡茶訣』、『竹田荘茶説』

（A／〇三四～A／〇四五）

田能村竹田に関する煎茶書については、桑芋翁原本、福州伝士然伝・火州僊胤再伝の茶書を竹田が翻刻したとされる『石山齊茶具図譜』、竹田の執筆による漢文で記述された煎茶書である『竹田荘泡茶訣』、『竹田荘泡茶訣』の和訳である『竹田荘茶説』の三冊がある。おそらくは、三冊とも本文中にある「己丑」の年記から文政十二年（一八二九）には執筆を終えていると考えられる。当初はそれぞれ単品として頒布されたものと考えられるが、やがて三冊を組み合わせにして、題箋を改題して帙を作り、『泡茶新書三種』として販売したと思われ、天保二年（一八三一）の年記の入った刊記があるものもある。その後、明治十三年（一八八〇）に『石山齋茶具図譜』と『竹田荘茶説』の二冊を組み合わせて『茶説図譜　上・下』と改題して刊行されている。何度も再版されていることから、煎茶界にも大きな影響を与えている。

これら三書の翻刻は、『田能村竹田全集　全一巻』国書刊行会と『大分県先哲叢書　田能村竹田資料集　著述篇』がある[20]

（A／〇三八）『泡茶新書三種』の書誌的データ

表紙：〔石山斎茶具図譜〕〔竹田荘泡茶訣〕〔竹田荘茶説〕の三冊ともに黄色、題箋：三冊ともに左肩、「泡茶新書三種」

〔石山斎茶具図譜〕

内題：本文初めに「石山斎茶具図譜」、尾題：なし、匡郭：単枠、九・一cm×六・五cm、行数：序は五行無罫、附録は八行（一部九行）罫入り、封面：なし、目次：なし

構成・丁付：序（一丁［A〇三七泡茶訣跋文と同じ］）、茶具図譜に「一」～「十五」（十五丁）、附録に「一」～「四」（四丁）、裏表紙裏に広告・刊記、以上全二十丁

広告：「煎茶仕様集　大枝流芳先生著　全二冊」、刊記：「天保二年辛卯正月新叢　浪華書林　南本町心斎橋通　河内屋吉兵衛」

〔竹田荘泡茶訣〕

内題：本文初めに「竹田荘泡茶訣」、尾題：本文末に「竹田荘泡茶訣終」、匡郭：単枠、九・〇cm×六・五cm、行数：序は五行無罫、本文は八行罫入り、封面なし、目次なし

構成・丁付：序（一丁）、本文に「一」～「五」（五丁）、器物図に「一」～「二」（二丁）、以上全八丁、広告・刊記：なし

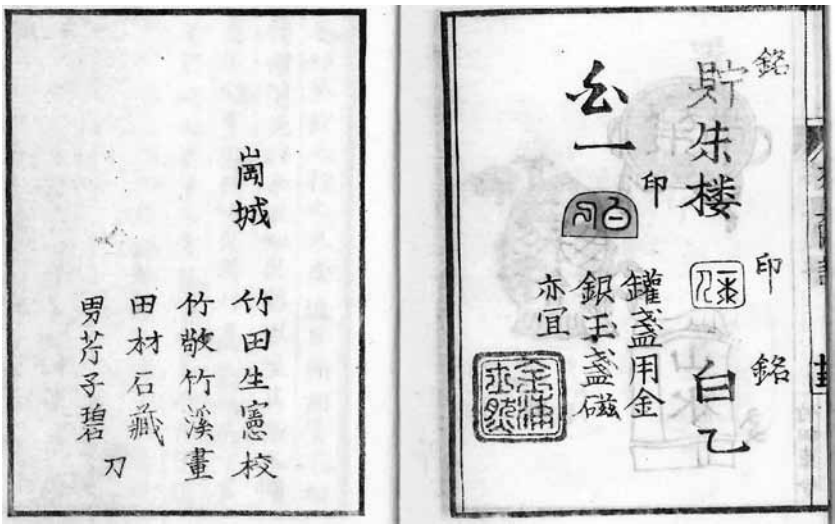
〔竹田荘茶説〕

内題：本文初めに「竹田荘茶説」、尾題：なし、匡郭：単枠、九・

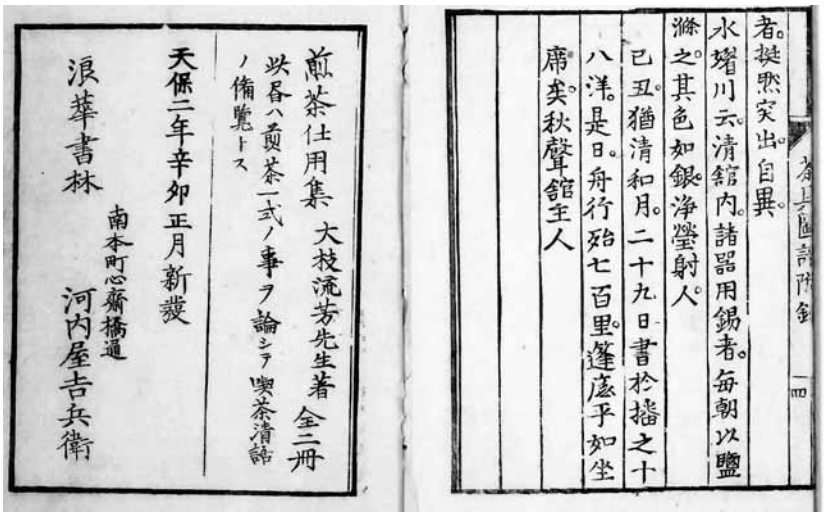
二cm×六・五cm、行数：序は七行無罫、本文は八行罫入り、封面：なし、目次：なし

構成・丁付：序に「一」～「二」（二丁）、本文に「一」～「九」（九丁）、以上全十一丁、広告・刊記：なし

なお、（A／〇三四）「石山齋茶具図譜」には、図版の後に刊記があって、「崗城　竹田生憲校／竹敬竹渓畫／田材石蔵／男芹子碧／刀」とある。また、序はそれぞれの書籍によってないものとあるものとがあり、都合三種類（柳橋二種、後藤一種）ある序と書籍との対応関係が必ずしも一致していない。また、（A／〇三七）では「武田荘茶説」のみに刊記がある。この点は早急に整理しておく必要がある。また、（A／〇四五）の『竹田自筆　泡茶訣』は、版木から新たに改版がなされている。**【図7】【図8】**



【図7】『石山齋茶具図譜』（A/034）の刊記



【図8】『泡茶新書三種』〔石山斎茶具図譜〕（A/038）の刊記

（十二）『和漢両泉　酒茶問答』（A／〇四六・A／〇四七）

酒好きの忘憂子（髷のある紋付の人、伊丹の樽井酔眠）と茶好きの清風子（剃髪で僧衣の人、宇治の産園羽仙）が、酒と茶という人を惑わす飲料について、両者の効用と害悪などを論じ、最後に傍らにいた一閑人（道服の人）が二人を調停するという酒茶論の一書。いわゆる室町期以来の酒茶論のパターンに則った江戸期のもの。純粋な意味での茶書とはいえないが、清風子が煎茶をたしなんでいる挿図がある。

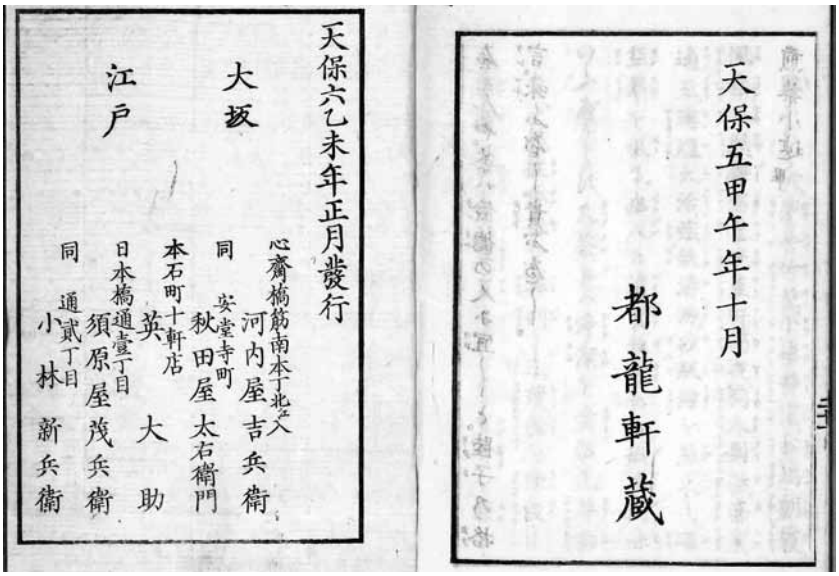
（A／〇四六）『和漢両泉　酒茶問答』の書誌的なデータ

表紙：水色、題箋：一部欠損、左肩、「和漢両泉　酒茶問答　全」、内題：本文初めに「和漢両泉　睡覚風雅　酒茶問答」、尾題：本文末に「和漢両泉　睡覚風雅　酒茶問答卒」、匡郭：単枠、一五・六cm×一〇・三cm（匡郭内側縦線が目視不可能なため、可視部分を計測）、行数：序は八行無罫、本文は八行無罫、跋文は七

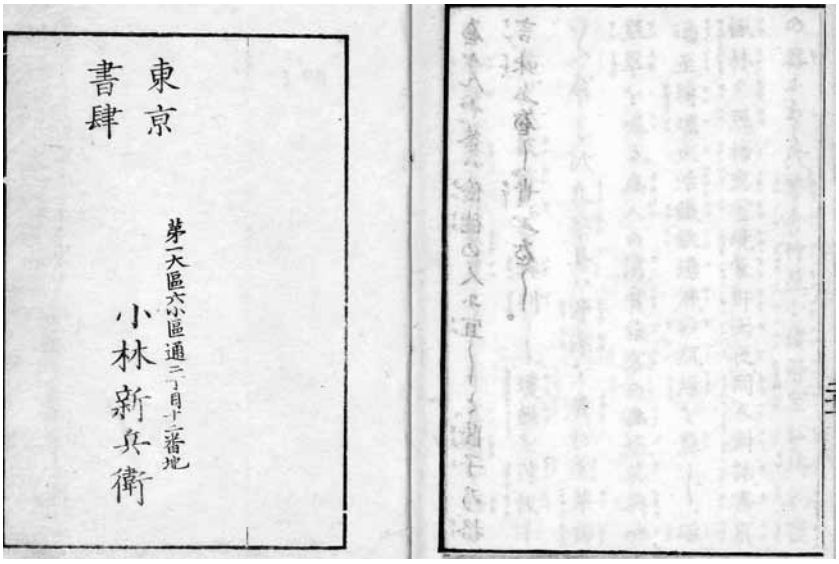
行無罫
封面：「和漢両泉　睡覚風雅　酒茶問答
全　平安三五園主人著　平安書房
松栄堂梓」、目次：なし
構成・丁付：表紙裏に封面、序（一丁）、本文（三十七丁半）、本文の二丁目・三丁目に「和漢両泉　酒茶問答」絵、十八丁目・十九丁目に「和漢両泉　流行圖」絵、絵（一丁）、跋文（半丁）、裏表紙裏に広告、以上全三十九丁
広告：「日用案文　書状文字自在引
全／神佛道歌松乃響　全」、刊記：なし

（十三）『煎茶小述』（A／〇四八～A／〇五〇）
『煎茶通』（A／〇五一・A／〇五二）

江戸日本橋の茶商山本山六代の徳潤による代表的な茶書。漢字にはルビがつき、文体も平易なため人気が高く、何度か再版されて刊行されているが、（A／〇四八）のように初版に近いと考えられるものは色刷りで美装であることから、特別な用途にもちいるものとして出版された可能性がある。（A／〇四九・A／〇五〇）は刊記の住所表示から明治期の再刊と推定でき、一般への頒布用と考えられる。その後『煎茶通』と改題し、別版で出版された。翻刻は、『日本庶民文化史料集成』第十巻数寄に、楢林忠男氏校注のものがある。[21]**【図9】【図10】**



【図９】『煎茶小述』（A/048）の刊記



【図10】『煎茶小述』（A/049）の刊記

（A／〇四八）『煎茶小述』の書誌的データ
表紙：緑色、帙：茶色、題箋：左肩、単枠、「煎茶小述　全」、内題：本文初めに「煎茶小述」、尾題：本文末に「煎茶小述畢」、匡郭：単枠、一四・五cm×九・九cm、行数：賞雨老人題は四行無罫、目次・本文は七行無罫
封面：三枠、「都龍軒山本徳潤著」「煎茶小述」「東都書肆　嵩山房発兌」
目次：茶之原、茶之效、蔵茶、擇器、擇水、擇炭、湯候、煎法

焙、淹茶、茶之産、百花茶、茶食、清賞
構成・丁次ぎ：表紙裏に封面、賞雨老人題に「一」～「二」（一丁半）、挿絵に「二」～「四」（二丁）、目次に「四」（半丁）、本文に「一」～「二十一」（二十一丁）、二十一丁裏と裏表紙に刊記、以上全二十五丁
刊記：「天保五甲午年十月／都龍軒蔵」「天保六乙未年正月発行／大阪　心斎橋筋南本丁北江入／河内屋吉兵衛／同　安堂寺町／秋田屋太右衛門／本石町十軒店／英大助／江戸　日本橋通壱丁目／須原屋茂兵衛／同　通貳丁目／小林新兵衛」

（A／〇五一）『煎茶通』の書誌的データ
表紙：水色、題箋：左肩、「煎茶通　全」、内題：本文初めに「煎茶通」、尾題：なし、匡郭：単枠、一四・六cm×一〇・〇cm、行数：賞雨老人題は四行無罫、目次・本文は七行無罫
封面：赤茶色、三枠「茶買山本主人著」「煎茶通」、左枠は空欄
目次：茶之原、茶之效、蔵茶、擇器、擇水、擇炭、湯候、煎法、焙、淹茶、茶之産、百花茶、茶食、清賞
構成・丁付：表紙裏に封面、賞雨老人題に「一」～「二」（一丁半）、挿絵に「二」～「四」（二丁）、目次に「四」（半丁）、本文に「一」～「二十一」（二十丁半）、白紙（半丁）、裏表紙裏に刊記、以上全二十五丁
刊記：「発行／書肆／東京市京橋区南傳馬町一丁目／松山堂本店／東京市神田区錦町壹丁目／松山堂支店／東京市神田区小川町／松山堂支店」

（十四）『新撰煎茶一覧』（A／〇五三・A／〇五四）

陸羽伝・売茶翁伝・秋成伝などをのせ、煎茶の歴史や道具などにも解説を加えた一書。京焼の煎茶道具を焼造する陶工などの記述や、茶器などにも言及し、一般への啓蒙書の性格が大きい。

（A／〇五三）『新撰煎茶一覧』の書誌的データ
表紙：茶色、表紙目次：中央よりやや左上、水色、一部欠損により不明部分あり、題箋：なし、内題：なし、尾題：なし、匡郭：単枠、七・〇cm×一五・四cm、行数：序文は十行無罫、賛は五行無罫、例言は十六行無罫、目次は十九行無罫、本文は十四行無罫、跋文は十一行無罫、封面：黄色、「清談楼主人輯／新撰煎茶一覧／平安／萬荘堂／□□」
目次：茶之傳、唐陸羽像並傳、賣茶翁像並傳、上田餘斎翁並傳、擇茶、茶之效、蔵茶、擇水、湯候、煎法、分量、飲法、盪滌、茶食、茶品目、茶具品目、茶席餝附図、火炉並涼炉図、水注図、湯罐図、茶瓶図並急尾焼図、茶器図、烏府図、飛閣図、竹瓢匙図、帛紗図、水杓図、火筴図、近世陶器家小傳、現存陶器家録
構成・丁付：表紙裏に封面、序文に「一」（一丁）〔所蔵印あり〕、賛に「二」（半丁）、挿絵に「二」～「三」（一丁）、例言に「三」（半丁）、目次（一丁）、本文・器物図・挿絵に「四」～「四十九」（「二十」～「二十四」及び「二十六」～「三十」は欠番［落丁ではない］）（三十六丁）、跋文に「五十」（一丁）、広告に「五十一」（半丁）、刊記に「五十一」～「五十二」（一丁）、白紙（半丁）、以上全四十三丁
広告：「清談楼主人著書目／煎茶一覧　後篇　一冊／皇朝茶譜

二冊／煎茶全書　三冊／金銀水　一冊」

刊記：「竹月斉蔵板〔判あり〕」「弘化四年新刻／発行書肆／東都　須原屋茂兵衛／山城屋佑兵衛／西宮弥兵衛／丁子屋平兵衛／英大助／小林新兵衛／須原屋伊八／岡田屋嘉七／尾陽　永楽屋東四郎／松屋善兵衛／浪花　秋田屋太右衛門／河内屋茂兵衛／秋田屋市兵衛／河内屋喜兵衛／平安　菱屋正次郎／出雲寺文次郎／近江屋佑太郎／亀屋善兵衛／丁子屋源次郎」

（十五）『煎茶手引之種』（A／〇五五～A／〇五八）

江戸日本橋の茶舗山本山の主人、徳潤が著した煎茶の指南書。挿絵は、葛飾北斎（一七六〇～一八四九）の娘である葛飾応為（生没年未詳）が描く。茶道具などの精緻な描写には、応為らしさがよく発揮されている。

（A／〇五六）『煎茶手引之種』の書誌的データ

表紙：薄茶色、表紙目録：中央よりやや左上、水色、一部欠損、「目録／茶事咏／茶式／古器圖／茶之始／茶驗効／檡茶／茶産品目／蔵茶／水論／器撰／檡炭／分量／湯候／煎法／淹茶／茶菓／清賞／附録／以上」、題箋：左肩、「煎茶手引之種　全」、薄茶色、内題：なし、尾題：本文末に「煎茶手引の種終」、匡郭：単枠、六・一cm×一四・七cm、行数：序は十三行無罫、目録は二十一行無罫、本文は十五行無罫

封面：薄鼠色、「煎茶手引之種」

目次：茶事咏、茶式、古器圖、茶之始、茶驗効、檡茶、茶産品目、蔵茶、水論、器撰、檡炭、分量、湯候、煎法、淹茶、茶菓、清賞、附録

構成・丁付　白紙（一丁半）、封面（半丁）、序（一丁）、目録に「一」（半丁）〔所蔵印あり〕、本文・器物図・挿絵に「一」～「三十五」（三十四丁半）、刊記（半丁）、白紙（半丁）、以上全三十九丁

広告：なし、刊記：「嘉永元戊申歳／大阪　河内屋喜兵衛／河内屋茂兵衛／京都　出雲寺文治郎／江都　英大助／須原屋茂兵衛／須原屋新兵衛」

（十六）『木石居煎茶訣』（A／〇五九～A／〇六三）

尾張藩の儒学者深田精一（号は百信・木石居など）の著作であるが、百信先生の口授を門人の河村澄（藍光）が筆受したものとされる。上巻には、百信居士深田精一の「自序」、父深田香実の「題兒精一茶具図解之首」、「凡例」、「引用書目」があり、本文として三十三種の「茶具図解」があって、最後に「木石居泡茶式略図」とその解説が記される。下巻には、自身の煎茶に関する所感を記した「總論」があり、附録として「品茶図解七煎法」と「品茶図解五煎法」、「品茶訣」を記し、「清事余韻」として自作の「嘗茶雑詩」二〇詠が添えられ、最後に藍光河村澄による「跋」があって、ほかの本の広告が入り、刊記となっている。本来ならば総論からはじまって各論の道具の解説に構成されるものだが、上下巻の順番・配列がこのようになったのは、「引用書目に照映するの便利と、覧者の人情、茶具の形状、称呼等に急なることをはかれる書肆が朝四暮三の慾をみたしむるためにかくは編次せしなり」とされる。「煎茶家に二あり。一は文人茶。一は俗人茶なり。」として、俗人茶は、教え教わる宗

【図11】『木石居煎茶訣』（A/062）の封面

匠茶をさし、そのありかたにはかなり辛辣な批判が加えられている。幕末期における文人茶を最上とする立場からの考え方として、注目すべき内容といえよう。【図11】

翻刻には、『東洋文庫二〇六　日本の茶書二』に楢林忠男氏の校注による『木石居煎茶訣』があるが、下巻の「總論」に関してのみ掲載されている。[22]

（A／〇六〇）『木石居煎茶訣』の書誌的データ

表紙：〔乾〕〔坤〕ともに水色、題箋：〔乾〕〔坤〕ともに左肩、それぞれ「煎茶訣　乾」「煎茶訣　坤」、帙：茶色、帙題箋、白色、内題：〔乾〕本文初めに「木石居煎茶訣巻之上　茶具図解」、〔坤〕本文初めに「木石居煎茶訣巻之下」、尾題：〔乾〕本文末に「木石居煎茶訣巻之上　終」、〔坤〕本文末に「木石居煎茶訣巻之下　終」、匡郭：〔乾〕単枠、一五・五cm×九・八cm、〔坤〕単枠、一五・四cm×九・八cm、行数：〔乾〕自序は六行罫入り、凡例・引用書目は八行無罫、本文・器物図は八行～十行無罫、〔坤〕本文は八行無罫、附録品茶図解は十行無罫、付録品茶訣は八行無罫、清事余韻は九行無罫、跋文は七行罫入り

封面：緑色、三枠、「百信深田先生述」「木石居煎茶訣全二冊」「尾張書肆　東壁堂梓」

目次：〔乾〕茶具図解（こんろ、こんろぶた、すみとり、すみ、ひばし、ゆわかし／きびしやう、ひしやく、みづさし、みづつぎ、かましき、はぢやつぼ、ちやわん、ちやだい、ちやわんいれ、ちやきん、ちゃかすいれ、こぼし、ちやがふ、たけばし、ちやぼん、点茶板、せんちやぶろ、同前、ひふきだけ、はぼうき、しうのう、涼布、換濯布、こんろだい、みづがめ、みづこし、だいす、たばこぼん）、〔坤〕総論、附録品茶図解七煎法、附録品茶図解五煎法、附録品茶訣、清事余韻

構成・丁付：〔乾〕自序に「一」～「二」（二丁）、凡例に「三」～「四」（二丁）、引用書目に「五」（一丁）、本文・器物図に「一」～「十六」（十六丁）、以上全二十一丁、〔坤〕本文に「一」～「七」（七丁）、附録品茶図解七煎法に「八」～「十」（三丁）、附録品茶図解五煎法に「十一」～「十二」（二丁）、附録品茶訣に「十三」～「十四」（一丁半）、清事余韻に「十四」～「十六」（二丁半）、跋文に「十七」（一丁）、尾張名古屋　東壁堂蔵版略目録（広告）に「目一」～「目十一」（十一丁）、裏表紙裏に広告の続きと刊記、以上全二十八丁

広告：「尾張名古屋東壁堂蔵版畧目録」、刊記：「尾州名古屋本町通七丁目永樂屋東四郎／江戸日本橋通白銀丁二丁目　同　出

店」

（十七）『清風煎茶要覧』（A／〇六四～A／〇六六）

茶に関する詩文、売茶翁伝、煎茶具の解説や闘茶の仕方など、一般向けの平易な解説書。『新撰煎茶一覧』の焼き直しの感もあるが、内容に若干の相違がある。煎茶の流行を物語るガイドブックといえよう。

（A／〇六四）『清風煎茶要覧』の書誌的なデータ

表紙：薄茶色、題箋：左肩、「清風煎茶要覧　全」、薄茶色、内題：なし、尾題：「清風煎茶要覧　終」、匡郭：単枠、六・八・cm×一五・二cm、行数：序は十二行無罫、目録・本文は十四行無罫、封面：「清風煎茶要覧　寛永四年　亥中春」〔印あり〕

目次：栂尾之圖、宇治茶摘之圖、唐陸羽之圖、賣茶翁圖並傳、茶席餝附圖、茶詩、茶畧傳、茶効、擇茶並茶名、擇水、火爐並涼炉圖、水注湯罐圖、茶瓶急尾焼圖、茶叉小道具圖、擇炭、湯候、煎茶大意、飲啜、茶分量、茶菓、盪滌、闘茶式今茶歌舞伎ト云、通仙式、玉川式、近世陶工名印録

構成・丁付：表紙裏に封面、序「〇一」（半丁）、目録「〇一」～「〇二」（一丁）、本文・挿絵・器物図「〇二」～「〇五十二」（四十四丁半）、本文の続きと刊記（半丁）、白紙（半丁）、裏紙〔印あり〕、以上全四十七丁

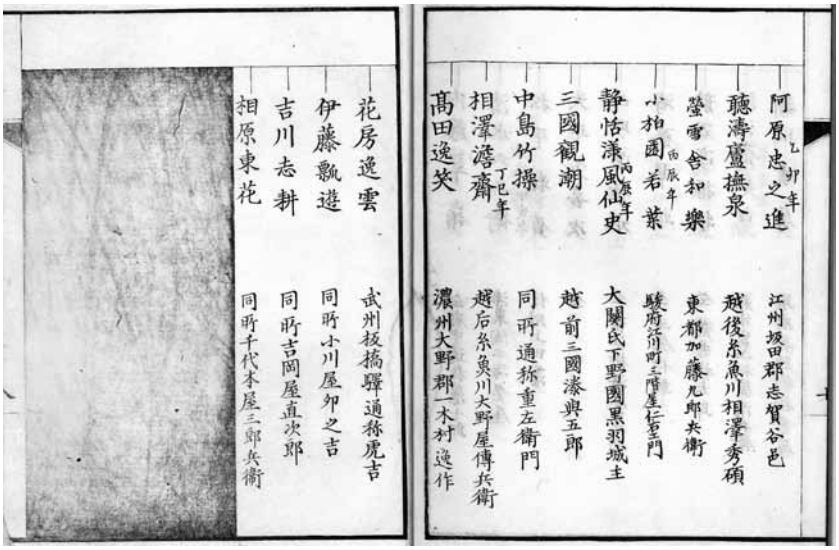
広告：なし、刊記：「洛士　東園編／寛永四年　□秋／書肆越後屋治兵衛／大阪　河内屋吉兵衛／同　河内屋藤兵衛／京都山城屋佐兵衛」

（十八）『煎茶綺言一』（A／〇六七～A／〇六九）
『煎茶綺言二』（A／〇七〇・A／〇七一）

東牛売茶および『煎茶綺言』については、長谷川瀟々居氏と前述の谷村為海氏の論考に詳しい[23]。谷村氏によれば、東牛売茶は寛政三年（一七九一）に京都西洞院綾小路下街に生まれ、九歳で剃髪して曹洞宗の僧となるも、還俗して江戸や京都に漂白し、大坂の高麗橋で茶舗を開いて宇治茶や道具、茶書などの販売とともに煎茶指南をしながら生計を立てた。大坂ではたびたび花月菴田中鶴翁（一七八二～一八四八）を訪ねて教えを受けたと言われる。その後も転々と所在を変えるが、人との交流には恵まれていたようで、その縁で煎茶に関する様々な活動を続け、明治十二年（一八七九）に京都五条坂で没する。

一方、著作の『煎茶綺言一』については、両氏とも本草家である曽占春による茶書『烹茶樵書』を底本とし、内容項目の順番の変更や部分的な削除や加筆をして、煎茶書の体裁に仕立て上げたものであるとする。さらに煎茶家系譜を新たに加えてはいるものの、谷村氏は全体としては盗作であると厳しく断定している。また、両氏ともこの煎茶家系譜については江戸初期の文人石川丈山を煎茶の祖とするなど、その論旨には疑問も多く、東牛の創作と推察している。特にこの系譜は『古事類苑』「遊戯部十二」（三版）の煎茶の項目に採録されていることから、谷村氏は世人の誤りを正すべく批判を加えるとする。なお、刊記には刊行年や発行書律を記していないが、版を重ねるたびに煎茶家系譜の年号と門人が増えており、明治四年度版までに何度か改版されている。

【図12】『煎茶綺言一』（A/067）の煎茶家系譜の年号



【図13】『煎茶綺言一』（A/068）の煎茶家系譜の年号

また、『煎茶綺言二』は、『煎茶綺言一』の続編として編纂された一書で、「小川信庵撰、煎茶会法式之書」「清人呉成充船中饗金右衛門式、八僊卓燕式記」の合冊である。これらの内容にもいささか錯誤や欺瞞、信用できない記述があり、信憑性に乏しいといわざるをえない。**【図12】【図13】**

（A／〇六七）『煎茶綺言一』の書誌的なデータ

表紙：濃紺色、題箋：白色、左肩、「煎茶綺言」、内題：本文初めに「煎茶綺言巻之一」、尾題：本文末に「煎茶綺言巻之一終」、

匡郭：単枠、一八・一cm×一二・八cm、行数：賛は五行無罫、本文・煎茶家系譜は九行無罫、

封面：濃茶色、三枠、「賣茶東牛翁著」「煎茶綺言」「魁々園蔵板」

目次：古今、釈名、性味、択芽、験水、択炭、湯候、選器、煎茶家系譜

構成・丁付：表紙裏に封面、挿絵（半丁）、賛（半丁）、本文「一」～「十四」（十四丁）、煎茶家系譜「一」～「七」（七丁）、七丁目に刊記、白紙（一丁）、以上全二十三丁

刊記：「東都樽正町伏見甚五郎刻」

（A／〇七〇）『煎茶綺言二』の書誌的なデータ

表紙：水色（文様）、題箋：白色、左肩、「煎茶綺言　一（二？）」、

内題：本文初めに「煎茶綺言巻之二」、尾題：本文末に「煎茶綺言巻之二終」、匡郭：単枠、一七・六cm×一三・〇cm（一八・〇cm×一三・〇cm）、行数：本文は九行無罫

封面：三枠、「賣茶東牛翁著」「煎茶綺言」「魁々園蔵板」

目次：煎茶會法式之書、八僊卓燕式記
構成・丁付：白紙（半丁）、封面（半丁）、本文（煎茶會法式之書）「一」～「十二」（十二丁）、本文（煎茶綺言巻之二下）「一」～「十四」（十四丁）、以上全二十七丁。広告・刊記：なし

（十九）『喫茶弁』（A／〇七三・A／〇七四）

京都の幕末の医師であり、煎茶小川流の祖である小川可進の著書。門人の求めに応じて病床の可進が煎茶の烹法や根本の原理などを口述し、橘諸見が筆記をして一書に仕上げた茶書である。陰陽説に則って衛生の観点からも煎茶に関して論述している。（A／〇七四）は明治十二年の再刊本で、この末尾には新たに可進の小伝がつけられた。翻刻は、『東洋文庫二〇六　日本の茶書二』に楢林忠男氏の校注による『喫茶弁』がある。[24]

（A／〇七三）『喫茶弁』の書誌的なデータ
表紙：白色（太極図の模様あり）、題箋：白色、左肩、「後樂堂喫茶弁」、内題：本文初めに「後樂堂喫茶弁」、尾題：なし、匡郭：単枠、一九・〇cm×一二・三cm、行数：序は六行無罫、目録・本文は八行無罫、封面：壷形の枠中に「小川可進先生編／喫茶弁／後樂堂塾蔵」
目次：法則、烹法　附茶瓶扱接之事、茶生、火生、水生、風生、茶具　附録
構成・丁付：表紙裏に封面貼付け、序「一」～「三」（三丁）〔一丁目に印あり〕、目録（一丁）、本文「喫茶弁一」～「喫茶弁廿五」（二十五丁）〔二十五丁目に印あり〕、以上全二十九丁
広告・刊記：なし

（A／〇七四）『喫茶弁』の書誌的なデータ
表紙：白色（太極図の模様あり）、題箋：白色、左肩、「小川可進著　喫茶弁」、内題：本文初めに「喫茶弁」、尾題：なし、匡郭：単枠、一九・〇cm×一二・三cm、行数：賛は二～三行無罫、序は六行無罫、目録・本文・付録は八行無罫、封面：黄色、壷形の枠中に「小川可進著／喫茶弁／後樂堂蔵」〔印あり〕、目次：法則、烹法　附茶瓶扱接之事、茶生、火生、水生、風生、茶具、附録（後楽翁小傳）
構成・丁付：表紙裏に封面貼付け、賛（一丁半）〔印あり〕、白紙（半丁）、序「一」～「三」（三丁）、目録（一丁）、本文「喫茶弁一」～「喫茶弁廿四」（七丁目落丁）（二十四丁）、付録（後楽翁小傳）「一」～「三」（三丁）、裏表紙裏に刊記〔定償印あり〕〔印あり〕、以上全三十二丁
刊記：「明治十二年四月十二日出版々權御願　同年同月廿六免許　同年五月廿七刻成／著者相続人　兼出版人　京都府士族　小川為美　京都府下上京区第拾七組薬屋町／四百貳十四番地／発売書林　石田忠兵衛　京都府下上京区第三十組寺町御池下ル町」

（二〇）『南宗茶具名牋』（A／〇七四・A／〇七五）

中国に置ける茶の儀礼を北と南に分派し、煎茶の儀礼を南宗派とし、諸道具の名称などを羅列し、茶席の決まり事や書画・文房の陳列の四方などを解説する。

（A／〇七四）『南宗茶具名牋』の書誌的なデータ

表紙：白色（文様あり）、題箋：白色、中央、「南宗茶具名牋」、内題：「南宗茶具名牋」、尾題：なし、匡郭：複枠、三五・三cm×六四・五cm、行数：南宗茶事分洒は八行罫入り、淹煎茶具標目は二十三行罫入り、茗讌酒器標目　は六行罫入り、烹茶會約五行罫入り、書画文房陳説は六行罫入り

封面：なし、目次：南宗茶事分洒　淹煎茶具標目　茗讌酒器標目　烹茶會約　書画文房陳説

構成・丁付：「南宗茶具名牋　文久紀元辛酉六月新鐫　全真茶寮蔵梓」〔印あり〕、南宗茶事分洒は八行罫入り、淹煎茶具標目は二十三行罫入り、茗讌酒器標目は六行罫入り、烹茶會約五行罫入り、書画文房陳説は六行罫入り、広告四行無罫、刊記三行無罫、以上前1枚

広告：「近刻書目／淹煎茶具図賛　二巻／烹茶集説　四巻／茶寮閑話　二巻／闘茶小品　附茶具器銘　一巻」、刊記：「毎部以此印記為信〔印あり〕」「東都　六禅居島孟克纂輯〔印あり〕／伊勢　不朽庵辻孝篤校訂〔印あり〕／半谷葬田可復録〔印あり〕」

（A／〇七四）はいわば一ページものの表組みの書籍である。一方、（A／〇七五）は昭和九年に清風流宗家田中六一によって別版で再刊された書籍である。内容に相違はないものの基本的には表組みをやめて記述され、一ページものの書籍に仕上げている。

（二一）『煎茶図式』（A／〇七六）

上野国伊勢崎の培公（七代藩主酒井忠恒）の好みによる煎茶具のしつらえのあらましを松谷山人に図版化させて掲載し、門人達や同好の士らに示した書籍。序と後序を記す今村了庵は上野伊勢崎藩の侍医を務めていた。

（A／〇七六）『煎茶図式』の書誌的なデータ

表紙：赤褐色、題箋：中央、「煎茶図式　全」、薄茶色、帙：茶色に文字文様、帙題箋：なし、内題：なし、尾題：なし、匡郭：単枠、16.9cm×24.8cm、行数：花山院右大臣家厚公の歌は五行無罫、了庵の漢詩読み下し文は十四行無罫、文章は二十行無罫、煎茶図式後序は十七行無罫、封面：なし、目次：なし

構成・丁付：一枚目は花山院右大臣家厚公の歌と挿絵、二枚目は了庵の漢詩読み下し文〔印あり〕、三枚目は文章、四～九枚目「一」～「六」は煎茶図、十枚目は煎茶図式後序は十七行無罫〔印あり〕、以上全十枚、広告・刊記：なし

（二二）『蓬仙茶話　茶器編』（A／〇七七・A／〇七八）

著者の川勝蓬仙は、若年寄にもなった武家。中国風の茶を好み、上方とは異なる江戸の煎茶文化に大きな影響を与えた。本書は煎茶の道具類を解説して、茶席のしつらえや飾り付けの図を付す。なお、（A／〇七八）は刊記の様態から明治期の再版本である。

（A／〇七七）『蓬仙茶話　茶器編』の書誌的データ

表紙：薄茶色題箋：白色、左肩、「蓬仙茶話　茶器編　全」、帙：茶色帙題箋：白色、内題：本文初めに「蓬仙茶話」、尾題：本文末に「蓬仙茶話　茶器編終」、匡郭：単枠、一三・八cm×九・

六cm、行数：蓬仙茶話序は七行無罫、序・亦愛廬図は六行無罫、本文・法古高木紹安文章は九行罫入り、跋文は五行無罫

封面：青色、三枠、「蓬仙先生著述」「蓬仙茶話茶器編」「慶應元年乙丑　高木法古蔵梓」、目次：なし

構成・丁付：表紙裏に封面、蓬仙茶話序「一」（一丁）〔印あり〕、序「一」～「二」（二丁）〔印あり〕、亦愛廬図「〇一」～「〇三」（三丁）〔印あり〕、本文「一」～「十六」（十六丁）、跋文「●二」、「●一」（二丁）〔印あり〕、古高木紹安文章「十五」（半丁）、罫入り紙（半丁）、以上全二十五丁、広告・刊記：なし

（二三）『淹茶小録』（A／〇七九）

煎茶道具の配列の図を載せて、葉茶や水の保存・選択、火の加減、道具の選び方などを解説し、詩文をのせる。幕末～明治初期の淹茶の様相を知ることができる。

（A／〇七九）『淹茶小録』の書誌的データ

表紙：白色、題箋：白色、左肩、「淹茶小録」、内題：「淹茶小録」、尾題：「淹茶小録　終」、匡郭：単枠、一二・七cm×八・〇cm、行数：賛は二行～三行無罫、序は五行無罫、茶具陳列位置図は六行無罫、本文・附録は七行罫入り、跋文は七行無罫

封面：黄色、三枠、「瑣洲田秉著」「淹茶小録」「氷清茶寮蔵梓」、上部枠外に「慶應丁卯秋新鐫」、目次：なし

構成・丁付：表紙裏に封面貼付け、賛（一丁）〔印あり〕、序（一丁）〔印あり〕、茶具陳列位置図「一」～「八」（八丁）〔印あり〕、本文「九」～「十六」（八丁）、附録（四丁）、跋文「廿二」（一丁）、以上全二十三丁、広告・刊記：なし

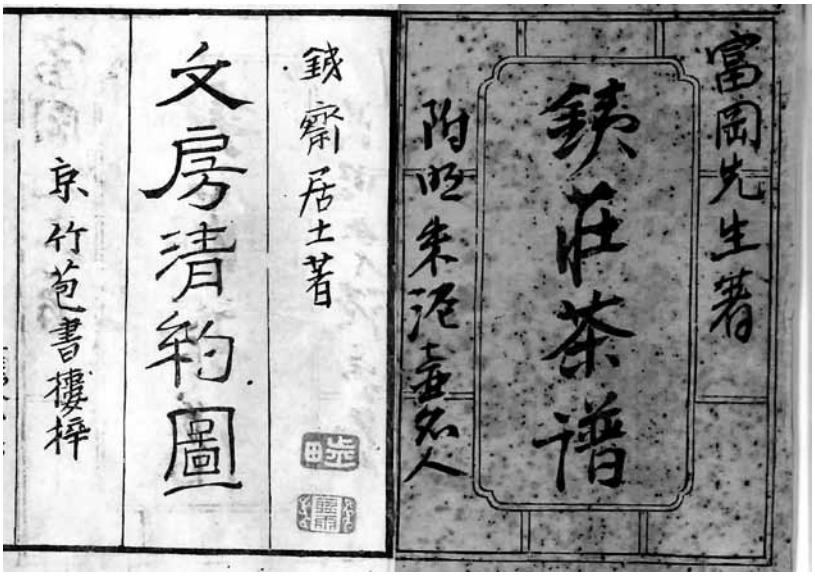
（二四）『鋏荘茶譜　陳列之部（文房清約図）』、『鋏荘茶譜　瓷壷之部（宣興瓷壷譜）』（A／〇八〇～A／〇八七）

城塚朋和氏の研究によれば[25]、『陳列の部』は「文房清約図」と題して、明代の文震亨（一五八五～一六四五）が元末の倪雲林の文房（書斎）を紹介した『清斎位置』を注釈したものを掲載し、『瓷壷之部』は「宣興瓷壷譜」と題して（「宣」は「宜」の誤り）、宜興窯産紫砂壷のはじまりと作家列伝を記した周高起（？～一六五四）の『陽羨茗壷系』を抄訳して、茶注の図と解説を載せたものである。文人画家として著名な富岡鉄斎（一八三七～一九二四）による著作であり、やや高等な部分もある解説書である。鉄斎は少年期に大田垣蓮月（一七九一～一八七五）の待童として京都で暮らし、人格形成にも大きな影響を受けたと言われる。歌人であった蓮月は、一方で煎茶の茶注や煎茶碗などを焼いて生計を立て、「蓮月焼」と呼ばれるほどに人気を博した。鉄斎の煎茶のたしなみも蓮月から受け継いだものと考えられる。**【図14】【図15】**

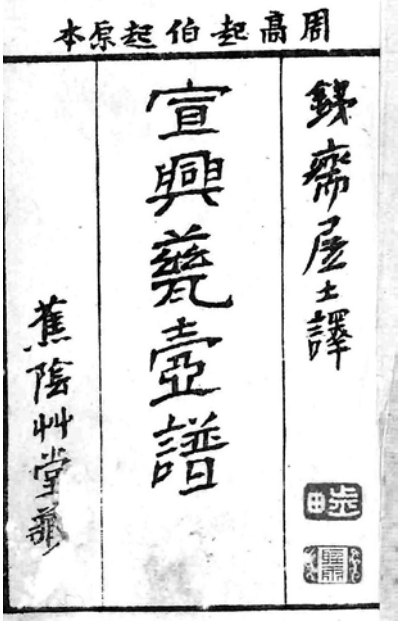
翻刻は、小高根太郎『富岡鉄斎の研究』「資料篇」に『鋏荘茶譜』の両書が収められている[26]。

（A／〇八〇）『鋏荘茶譜　陳列之部（文房清約図）』、『鋏荘茶譜　瓷壷之部（宣興瓷壷譜）』の書誌的データ

表紙：〔陳列之部〕薄茶色、〔瓷壷之部〕薄茶色、大きく欠損、題箋：〔陳列之部〕白色、左肩、「鋏荘茶譜　陳列之部」、〔瓷壷之部〕なし（欠損か）、内題：〔陳列之部〕本文初めに「清斎位



【図14】『鋏荘茶譜　陳列之部（文房清約図）』（A/080）の封面



【図15】『鋏荘茶譜　瓷壺之部（宣興瓷壺譜）』（A/080）の封面

置」、〔瓷壺之部〕なし、尾題：〔陳列之部〕なし、〔瓷壺之部〕なし、匡郭：〔陳列之部〕単枠、一〇・三cm×七・〇cm、〔瓷壺之部〕単枠、一〇・一cm×六・九cm、行数：〔陳列之部〕賛は四行無罫、本文は八行無罫なし、〔瓷壺之部〕小引・序は七行無罫、本文は七～八行無罫

封面：〔陳列之部〕二枚、橙色、三枠、「富岡先生著」「鋏斎茶譜」「附明朱泥壺名人」、白、三枠、「鋏斎居士著」「文房清約図」「京竹苞書楼梓」、〔瓷壺之部〕白、三枠、「鋏斎居士譯」「宣興瓷壺譜」「蕉陰艸堂蔵」、罫線上部に「周高起伯起原本」とあり

目次：〔陳列之部〕小室、坐具、置餅、坐机、懸画、桑苧遺韻、〔瓷壺之部〕供春、歐正春、董翰、趙梁、玄錫、時朋、時大彬、李茂林、李仲芳、陳光甫、閔魯生、邵文金、邵文銀、蔣伯荅、陳用卿、陳信卿、徐友泉、陳仲美、沈君用、邵蓋、周後谿、邵二孫、陳俊卿、周季山、陳和之、陳挺生、承雲從、沈君盛

構成・丁付：〔陳列之部〕表紙裏に封面貼付け、封面（半丁）〔印あり〕、白紙（半丁）、賛（一丁）、本文（文房清約図）・茶具図（十四丁）、以上全十六丁、〔瓷壺之部〕封面（半丁）〔印あり〕、白紙（半丁）、小引（一丁）、挿絵（半丁）、序（半丁）、本文（宣興瓷壺譜）（二十一丁）〔二十一丁目に印あり〕、以上全二十四丁、

広告・刊記：なし

三、おわりに

谷村為海煎茶関連資料の江戸期の煎茶書類について、二四種類の書籍を取り上げて、書誌的なデータをまとめた。煎茶書とは、煎茶

に関わるさまざまな事項を扱った、いわゆる今日言われるマニュアル本、ハウツー本である。江戸期の煎茶書にはおおよそ二通りのものがある。ひとつは、『梅山種茶譜略』『青湾茶話』『清風瑣言』『石山齋茶具図譜』『竹田荘泡茶訣』『竹田荘茶説』『木石居煎茶訣』『喫茶弁』『銕荘茶譜』へと連なるもので、「茶」に関する過去の事蹟や文書類、中国の茶書などを総覧し抜粋して検証し、それぞれの著者の趣向や思想を語るという、高踏的な内容の一群である。もう一つは、『煎茶略説』『自弁茶略』『淹茶式』『煎茶小述』『新撰煎茶一覧』『煎茶手引之種』『清風煎茶要覧』に続いてゆく、平易で実用性にも重点を置く簡便な入門書の系譜である。趣味や儀礼、芸能などに対する解説書のこうした二つの方向性は、どんな分野でも多少の差をもって存在するが、江戸期の煎茶書に限っては、その高踏性はかなりのものであり、『青湾茶話』『清風瑣言』『石山齋茶具図譜』『竹田荘泡茶訣』『竹田荘茶説』『木石居煎茶訣』が明治期までに再版を重ねるのもこうした古くさくはならない思想性・精神性の反映であろう。一方で、実用的な一群のものは、現実の煎茶が改良を加えられて発展して行くにつれて、一般的には記述内容が時代遅れとなって、再版の価値が失われて行く。とはいえ『煎茶略説』『自弁茶略』『煎茶小述』についてはバランスのよい平易さが評価されて再版されたものと考える。一方で、古くさくない装いをまとうために、内容は同じながらも改題という方法がはじまって、『煎茶仕様集』や『煎茶早指南』が次世代にも再刊される状況ができてきたのかもしれない。また、実務的な内容であるからこそ、『煎茶略説』や『自弁茶略』などは当時の状況を知ることができる媒体として、陶磁史・工芸史の観点から、今後とも大いに役立つ情報ソースとなろう。

谷村為海煎茶関連資料に関して通観すると、煎茶書類はそのごく一部である。本稿の末尾に掲げたそのリストを見ると、煎茶の関連書籍ではあるものの、その多様な分野にわたる刊本類の種類の多さには驚かされる。谷村氏の版本類の収集は、茶の効用、茶に関わる文化的な思想、おいしい茶を入れるための所作や手わざの方法にまで解説した煎茶書類（A）、宮崎修多氏が集成を試みた[27]幕末から明治・大正・昭和初期までの大寄せの茶会で使われた道具の目録と茶会の情景を描いた席画の挿図がついた茗讌図録類（B）、中国茶書や日本での翻刻本、翻訳本などに関する書物（C）、さらに、茶の湯の関連書籍（D）、茶葉の生産に関する製茶書（E）、煎茶人による他分野の著作、茶の医学的な効用や茶に関わる詩歌など（F）、黄檗文化や江戸期の禅宗関連の著述（G）、辞書類・随筆・文学・その他（H）など日本の煎茶文化とそれに関連する広範な分野に及ぶ。また煎茶書・翻刻本などは再刊本・再版本などもそろい、書誌学的な研究にも充分活用しうる極めて充実した収集品といえる。谷村為海煎茶研究資料に含まれるコピー類までを通観すれば、煎茶文化に関する研究のための基本文献はほぼ網羅されているといっても過言ではない。これらの資料に対する書誌的なデータの整理・蓄積はまだまだ充分ではなく、今後の大きな課題である。

なお、本稿の書誌的データの整理に関しては、一昨年度と昨年度のインターン研修の成果を反映している。一昨年度の作業には京都大学公共政策大学院の小松旭氏と同志社大学大学院文化情報学研究科の安東真理子氏の、昨年度の作業には同志社大学大学院文学研究科の和氣遥氏の多大なる協力をいただいた。記して感謝の意を表したい。

また、平成二六年の年末に、谷村アイ氏の訃報を谷村政通氏からいただいた。五月に永眠され、享年一〇二歳とのことであった。アイ氏のご冥福をお祈りいたすとともに、谷村政通・陽子ご夫妻には寄贈に際して様々なご協力をいただいた。ここに改めて感謝の意を表したい。

註

1 この間の経緯と資料の簡単な概要は、守屋雅史「谷村為海氏と煎茶関連資料」『美をつくし』一六九号、大阪市立美術館（二〇〇九）に記している。

2 大阪市立美術館編『文人のあこがれ、清風のこころ　煎茶・美とそのかたち』大阪市立美術館（一九九七）

3 『御陵墓諸表誌』〔昭和十年（一九三五）七月刊行〕

『陵墓聖鑑一巻（大和・高市吉野）』〔昭和二十年（一九四五）十一月刊行〕

4 堺市博物館編『百舌鳥古墳群の陵墓古写真集：明治・大正・昭和初期』堺市博物館（二〇〇九）

堺市博物館編『陵墓古写真集：古市古墳群・磯長谷古墳群・宇度墓・三嶋藍野陵、第二巻』堺市博物館（二〇一一）

5 谷村為海「遺品　陶像　画像」・「遺墨」『生誕三百年記念出版　売茶翁集成　―遺品・遺墨・偈語・伝記―』主婦の友社編集・発行〔昭和五十年（一九七五）〕、

6 谷村為海「売茶翁高遊外」・「東牛売茶翁」『現代煎茶道事典』主婦の友社編集・発行〔昭和五六年（一九八一）〕

7 谷村為海「売茶翁年譜」『売茶翁』佐賀県立博物館編集・発行〔昭和五八年（一九八三）〕

8 煎茶書の紹介に際しては以下の著作を参照した。

長谷川瀟々居「茶書目録　附略解」『煎茶志』便利堂（一九六五）

林屋辰三郎・横井清・楢林忠男編注『東洋文庫二〇六　日本の茶書二』平凡社（一九七二）

藝能史研究會編『日本庶民文化史料集成』第十巻数寄、三一書房（一九七六）

佃一祐「煎茶の書物」『現代煎茶道事典』主婦の友社編集・発行（一九八一）

9 大槻幹郎『売茶翁偈語　訳注』全日本煎茶道連盟（二〇一三）

漆原拓也「文人煎茶の原点―売茶翁の煎茶席―」『法政大学大学院紀要』（二〇一四）

10 楢林忠男校注「梅山種茶譜略」『東洋文庫二〇六　日本の茶書二』平凡社（一九七二）

11 奥田昌子「大枝流芳と青湾茶話　―上田秋成著「清風瑣言」の再検討―」『芸能史研究』NO.十五（一九六六）

12 翠川文子「大枝流芳（岩田信安）小考」『川村学園女子大学紀要』第十五巻二号（二〇〇四）

13 楢林忠男校注「青湾茶話（煎茶仕用集）」『東洋文庫二〇六　日本の茶書二』平凡社（一九七二）

「有聲文庫たより」二～三二『煎茶道』第六二五号～第六五五号（二〇〇九～一二）

14 岩橋小彌太編『上田秋成全集』第二　国書刊行会（一九二三）

「清風瑣言」『日本随筆大成』二期十四巻　吉川弘文館（一九二九）

楢林忠男校注「清風瑣言」『東洋文庫二〇六　日本の茶書二』平凡社（一九七二）

中村幸彦編「清風瑣言」『上田秋成全集』第九巻　中央公論社（一九九二）

「有聲文庫たより」三三～六六『煎茶道』第六二五号～一九九二第六五五号（二〇〇九～一五）

15 市橋鐸「なごやの本」『文化財叢書二九』名古屋市教育委員会（一九六二）

延広真治「柳下亭嵐翠ノート」『近世の学芸』三古会（一九七六）

16 名古屋市教育委員会編「『自弁茶略』」『名古屋叢書　第十六巻（風俗芸能編　第一）名古屋市教育委員会（一九六〇）

楢林忠男校注「煎茶早指南」『東洋文庫二〇六　日本の茶書二』平凡社（一九七二）

17 岩間真知子『喫茶の歴史―茶薬同源をさぐる』大修館書店（二〇一五）

18 楢林忠男校注「烹茶樵書」『日本庶民文化史料集成』第十巻数寄、三一書房（一九七六）

19 楢林忠男校注「煎茶式」『日本庶民文化史料集成』第十巻数寄、三一書房（一九七六）

20 早川純三郎編『田能村竹田全集　全一巻』国書刊行会（一九一六）

大分県教育庁管理部文化課編『大分県先哲叢書　田能村竹田資料集　著述篇』大分県教育委員会（一九九二）

21 楢林忠男校注「煎茶小述」『日本庶民文化史料集成』第十巻数寄、三一書房（一九七六）
22 楢林忠男校注「木石居煎茶訣」『東洋文庫二〇六　日本の茶書二』平凡社（一九七二）
23 長谷川瀟々居『煎茶志』便利堂（一九六五）
谷村為海「東牛売茶翁」『現代煎茶道事典』主婦の友社編集・発行〔昭和五六年（一九八一）〕
24 楢林忠男校注「喫茶弁」『東洋文庫二〇六　日本の茶書二』平凡社（一九七二）
25 城塚朋和「富岡鉄斎と宜興紫砂器」『明星大学造形芸術学科研究紀要』第十一号（二〇〇三）
26 小高根太郎「宣興瓷壷譜」『富岡鉄斎の研究』藝文書院（一九四四）
27 宮崎修多「茗讌図録の時代」『文学』第七巻第三号、岩波書店（一九九六）

谷村為海煎茶関連資料リスト

凡例
・リストの作品は、枝番号、書籍名称、著者・編者、出版元、刊行年ほか、員数、〇内は表紙の色など　の順に記した
・書籍名称については、基本的には題箋や封面、内題などを参照して命名した。

【A．煎茶書など】（館蔵品番号：八六四〇）

A／〇〇一　『梅山種茶譜略』売茶翁高遊外、栂尾高山寺蔵板、延享五年成（一七四八）、天保九年刊（一八三八）　一冊（緑色）
A／〇〇二　『梅山種茶譜略』売茶翁高遊外、栂尾高山寺蔵板、延享五年成（一七四八）、天保九年刊（一八三八）　一冊（丹色）
A／〇〇三　『梅山種茶譜略』売茶翁高遊外、栂尾高山寺蔵板、延享五年成、明治二六年序（一八九三）〔再版〕　一冊（薄茶色）
A／〇〇四　『青湾茶話　上・下・付録』大枝流芳、渋皮清右衛門ほか、宝暦六年刊（一七五六）　三冊（茶色）
A／〇〇五　『青湾茶話　上・下・付録（合本）』大枝流芳、渋皮清右衛門ほか、宝暦六年刊（一七五六）　一冊（合本、茶色）
A／〇〇六　『青湾茶話　上・下』大枝流芳、渋皮清右衛門ほか、宝暦六年刊（一七五六）　二冊（薄茶色）
A／〇〇七　『青湾茶話　上・下・付録』大枝流芳、渋皮清右衛門ほか、宝暦六年刊（一七五六）　三冊（青色）
A／〇〇八　『煎茶仕用集　下』大枝流芳、河内屋吉兵衛、文化二年刊（一八〇五）〔「青湾茶話」改題〕　一冊（下巻のみ、青色）
A／〇〇九　『煎茶仕用集　上・下』大枝流芳、河内屋吉兵衛、〔「青湾茶話」改題〕二冊（薄青色）
A／〇一〇　『煎茶仕用集　上・下』大枝流芳、須原屋茂兵衛ほか、〔「青湾茶話」改題〕　二冊（青色）
A／〇一一　『煎茶仕用集　上・下』大枝流芳、梶田源助、大正二年刊（一九一三）、〔再版〕　二冊（薄茶色）
A／〇一二　『煎茶仕用集　上・下』大枝流芳、梶田源助、大正二年刊（一九一三）、〔再版〕　二冊（緑色）
A／〇一三　『考茶録　全（煎茶早指南）』歌口、安永八年序（一七七九）　一冊（茶色）
A／〇一四　『考茶録　全（煎茶早指南）』歌口、安永八年序（一七七九）　一冊（暗褐色）
A／〇一五　『清風瑣言　上・下』上田秋成、鷦鷯惣四郎ほか、寛政六年刊（一七九四）　二冊（帙入、薄鼠色）
A／〇一六　『清風瑣言　全』上田秋成、中川藤四郎ほか、寛政六年刊（一七九四）一冊（薄緑色）
A／〇一七　『清風瑣言　上・下』上田秋成、中川藤四郎ほか、寛政六年刊（一七九四）　二冊（薄青色）
A／〇一八　『清風瑣言　上・下』上田秋成、中川藤四郎ほか、寛政六年刊（一七九四）　二冊（帙入、濃紺色）
A／〇一九　『清風瑣言　上・下（合本）』上田秋成、中川藤四郎ほか、寛政六年刊（一七九四）　一冊（合本、暗水色）
A／〇二〇　『清風瑣言　上・下』上田秋成、中川藤四郎ほか、寛政六年刊（一七九四）　二冊（水色）
A／〇二一　『煎茶略説　全』沢田楽水居、寛政十年戊午跋（一七九八）　一冊（白色）
A／〇二二　『煎茶略説　全』沢田楽水居、寛政十年戊午跋（一七九八）　一冊（灰色）
A／〇二三　『煎茶略説　全』沢田楽水居、青木恒三郎、〔明治期の再版〕　一冊（青色）
A／〇二四　『自弁茶略　全』街頭道者嵐翠、片埜東四郎、享和三年癸亥刊（一八〇三）　一冊（茶色）

A／〇二五　『煎茶早指南　全』街頭道者嵐翠、永楽屋東四郎、享和二年壬戌叙（一八〇二）　一冊（緑色）

A／〇二六　『煎茶早指南　全』街頭道者嵐翠、須原屋茂兵衛ほか、享和二年壬戌叙（一八〇二）　一冊（白色）

A／〇二七　『煎茶早指南　全』街頭道者嵐翠、須原屋茂兵衛ほか、享和二年壬戌叙（一八〇二）　一冊（白色）

A／〇二八　『煎茶早指南　全』街頭道者嵐翠、青木恒三郎、〔明治期の再版〕一冊（薄茶色）

A／〇二九　『烹茶樵書　茶寮図賛附刻』曾占春・大窪詩仏、前川弥兵衛、享和三年癸亥序（一八〇三）　一冊（帙入、薄水色）

A／〇三〇　『煎茶式　全』隠君雪斎（増山雪斎）、尚古斎蔵板、文化元年跋（一八〇四）　一冊（帙入、薄茶色）

A／〇三一　『茶史』真間人（豊田甚右衛門旁訳）、文化五年戊辰跋（一八〇八）一冊（茶色）

A／〇三二　『淹茶式　全』自適窩主人、文政二年刊（一八一九）　一冊（薄茶色）

A／〇三三　『淹茶式　全』自適窩主人、文政二年刊（一八一九）　一冊（薄茶色）

A／〇三四　『茶具図譜（石山齋茶具図譜）』田能村竹田、文政十二年己丑跋（一八二九）　一冊（A／〇三五と帙入、白色）

A／〇三五　『泡茶説（竹田荘泡茶訣）』田能村竹田、文政十二年己丑跋（一八二九）一冊（題箋と内題が異なる、A／〇三四と帙入、白色）

A／〇三六　『茶具図譜（石山齋茶具図譜）』田能村竹田、文政十二年己丑序（一八二九）　一冊（黄色）

A／〇三七　『泡茶新書三種（石山齋茶具図譜）・泡茶訣・竹田荘茶説』田能村竹田、〔茶説に刊記：河内屋吉兵衛、天保二年刊（一八三一）、改題「図譜」と「泡茶訣」「茶説」との合冊〕　三冊（帙入、黄色）

A／〇三八　『泡茶新書三種』田能村竹田、〔図譜に刊記：河内屋吉兵衛、天保二年刊（一八三一）、「図譜」「泡茶訣」「茶説」合冊改題〕　三冊（帙入、黄色）

A／〇三九　『泡茶新書三種（石山齋茶具図譜）』田能村竹田、文政十二年己丑序（一八二九）　一冊（一冊のみ、黄色）

A／〇四〇　『泡茶新書三種（石山齋茶具図譜）』田能村竹田、文政十二年己丑序（一八二九）　一冊（一冊のみ、黄色）

A／〇四一　『泡茶新書三種（石山齋茶具図譜）』田能村竹田、河内屋吉兵衛、天保二年刊（一八三一）　一冊（一冊のみ、黄色）

A／〇四二　『茶説図譜　上・下』田能村竹田、佐々木惣四郎、明治十三年刊（一八八〇）〔「竹田荘茶説」「石山斎茶具図譜」合冊改題〕　二冊（薄茶色）

A／〇四三　『茶説図譜　上・下』田能村竹田、佐々木惣四郎、明治十三年刊（一八八〇）〔「竹田荘茶説」「石山斎茶具図譜」合冊改題〕　二冊（薄黄色）

A／〇四四　『茶説図譜　上・下』田能村竹田、佐々木惣四郎、明治十三年刊（一八八〇）〔「竹田荘茶説」「石山斎茶具図譜」合冊改題〕　二冊（薄黄色）

A／〇四五　『竹田自筆　泡茶訣』田能村竹田、竹苞楼、文政十二年己丑跋（一八二九）〔再版〕　一冊（茶色）

A／〇四六　『和漢両泉　酒茶問答　全』三五園月麿、めとぎ屋幸助、天保十二年序（一八四一）　一冊（水色）

A／〇四七　『和漢両泉　酒茶問答　全』三五園月麿、めとぎ屋幸助、天保十二年序（一八四一）　一冊（水色）

A／〇四八　『煎茶小述』山本徳潤、河内屋吉兵衛、天保六年刊（一八三五）一冊（帙入、緑色）

A／〇四九　『煎茶小述　全』山本徳潤、小林新兵衛、〔明治期の再版〕　一冊（白色）

A／〇五〇　『煎茶小述　全』山本徳潤、小林新兵衛、〔明治期の再版〕　一冊（白色）

A／〇五一　『煎茶通』山本徳潤、松山堂本店、〔弘化四年刊（一八四七）、「煎茶小述」改題〕　一冊（水色）

A／〇五二　『煎茶通』山本徳潤、松山堂書店、〔弘化四年刊（一八四七）、「煎茶小述」改題〕　一冊（茶色格子）

A／〇五三　『新撰煎茶一覧』清談楼主人、須原屋茂兵衛ほか、弘化四年刊（一八四七）　一冊（茶色）

A／〇五四　『新撰煎茶一覧』清談楼主人、須原屋茂兵衛ほか、弘化四年刊（一八四七）　一冊（茶色）

A／〇五五　『煎茶手引之種　全』山本主人（徳潤）、河内屋喜兵衛ほか、嘉永元年（一八四八）　一冊（薄茶色）

A／〇五六　『煎茶手引之種　全』山本主人（徳潤）、河内屋喜兵衛ほか、嘉永元年（一八四八）　一冊（薄茶色）

A／〇五七　『煎茶手引之種　全』山本主人（徳潤）、河内屋喜兵衛ほか、嘉永元年（一八四八）　一冊（暗緑色）

A／〇五八　『煎茶手引之種　全』山本主人（徳潤）、河内屋喜兵衛ほか、嘉永元年（一八四八）　一冊（暗緑色）

A／〇五九　『木石居煎茶訣　乾・坤』深田精一、永楽屋東四郎、嘉永二年己酉序（一八四九）　二冊（帙入、水色）

A／〇六〇　『木石居煎茶訣　乾・坤』深田精一、永楽屋東四郎、嘉永三年庚戌封面（一八五〇）　二冊（帙入、水色）

A／〇六一　『木石居煎茶訣　乾・坤』深田精一、永楽屋東四郎、嘉永三年庚戌封面（一八五〇）　二冊（帙入、茶色）

A／〇六二　『木石居煎茶訣　乾・坤』深田精一、梶田勘助、明治三七年刊（一九

A／〇六三　〇四）、〔再版〕　二冊（白色）
『木石居煎茶訣　乾・坤』深田精一、梶田勘助、明治三七年刊（一九〇四）、〔再版〕　二冊（緑色）
A／〇六四　『清風煎茶要覧　全』東園、越後屋治兵衛ほか、嘉永四年刊（一八五一）　一冊（薄茶色）
A／〇六五　『清風煎茶要覧　全』東園、越後屋治兵衛ほか、嘉永四年刊（一八五一）　一冊（白色）
A／〇六六　『清風煎茶要覧　全』東園、山城屋佐兵衛、嘉永四年刊（一八五一）　一冊（茶色）
A／〇六七　『煎茶綺言　全』売茶東牛、魁々園蔵板、安政三年丙辰記（一八五六）　一冊（巻之一、濃紺色）
A／〇六八　『煎茶綺言　一』売茶東牛、魁々園蔵板、安政四年丁巳記（一八五七）　一冊（濃紺色）
A／〇六九　『煎茶綺言　一』売茶東牛、魁々園蔵板、明治四年記（一八七一）　一冊（水色）
A／〇七〇　『煎茶綺言　二』売茶東牛、魁々園蔵板、万延元年庚申跋（一八六〇）　一冊（水色）
A／〇七一　『煎茶綺言　三』売茶東牛、魁々園蔵板、万延元年庚申跋（一八六〇）　一冊（水色）
A／〇七二　『喫茶弁』小川可進、安政四年跋（一八五七）　一冊（A／〇七三と帙入、白色）
A／〇七三　『喫茶弁』小川可進、小河為美、明治十二年刊（一八七九）〔再版〕　一冊（A／〇七三と帙入、白色）
A／〇七四　『南宗茶具名牋』島孟克纂輯、全真茶寮、文久元年刊（一八六一）　一冊（白色）
A／〇七五　『南宗茶具名牋』島孟克纂輯、田中六一、昭和九年刊（一九三四）〔再版〕　一冊（茶色）
A／〇七六　『煎茶図式』今村了菴、慶応元年後序（一八六五）　一冊（帙入、茶色）
A／〇七七　『蓬仙茶話　茶器編　全』蓬仙窩主人（川勝蓬仙）、高木法古、慶応元年封面（一八六五）　一冊（帙入、薄茶色）
A／〇七八　『蓬仙茶話　茶器編　全』蓬仙窩主人（川勝蓬仙）、松山堂書店、〔明治期の再版〕　一冊（薄茶色）
A／〇七九　『淹茶小録』太田秉、氷清茶寮、慶応三年丁卯封面（一八六七）　一冊（白色）
A／〇八〇　『鋏荘茶譜　陳列之部・瓷壷之部（文房清約図・宣興瓷壷譜）』富岡鉄斎、竹苞書楼・蕉陰艸堂、慶応三年丁卯序（一八六七）　二冊（薄茶色）
A／〇八一　『鋏荘茶譜　瓷壷之部（宣興瓷壷譜）』富岡鉄斎、蕉陰艸堂、慶応三年丁卯序（一八六七）　一冊（一冊のみ、薄茶色）
A／〇八二　『鋏荘茶譜　陳列之部・瓷壷之部（文房清約図・宣興瓷壷譜）』富岡鉄斎、竹苞書楼・蕉陰艸堂、慶応三年丁卯序（一八六七）　二冊（小型、薄茶色）
A／〇八三　『鋏荘茶譜　陳列之部（文房清約図）』富岡鉄斎、竹苞書楼、慶応三年丁卯序（一八六七）　一冊（一冊のみ、小型、薄茶色）
A／〇八四　『鋏荘茶譜　陳列之部・瓷壷之部（文房清約図・宣興瓷壷譜）』富岡鉄斎、竹苞書楼・蕉陰艸堂、慶応三年丁卯序（一八六七）　二冊（粗紙、薄茶色）
A／〇八五　『鋏荘茶譜　陳列之部・瓷壷之部（文房清約図・宣興瓷壷譜）』富岡鉄斎、竹苞楼銭屋惣四郎、慶応三年丁卯序（一八六七）　二冊（粗紙、茶色）
A／〇八六　『鋏荘茶譜　陳列之部・瓷壷之部（文房清約図・宣興瓷壷譜）』富岡鉄斎、竹苞楼銭屋惣四郎、慶応三年丁卯序（一八六七）　二冊（粗紙、茶色）
A／〇八七　『鋏荘茶譜　陳列之部（文房清約図）』富岡鉄斎、竹苞楼銭屋惣四郎、慶応三年丁卯序（一八六七）　一冊（一冊のみ、粗紙、茶色）
A／〇八八　『煎茶指南茗讌図録　乾』山本誉吉、明治十七年（紀元二五四一年）序（一八八四）　一冊（乾冊のみ、黄褐色）
A／〇八九　『品茶譜』柚木梶雄編輯、久我早苗、明治二八年刊（一八九五）　一冊（帙入、白色）
A／〇九〇　『煎茶式　前編・後編』大塚益郎、香樹園・吉川弘文館、明治四二年刊（一九〇九）　二冊（各々帙入、薄茶色）
A／〇九一　『沙園煎茶規　完』田近岩彦、熊谷鳩居堂、大正四年刊（一九一五）　一冊（薄茶色）
A／〇九二　『沙園煎茶規　完』田近岩彦、熊谷鳩居堂、大正四年刊（一九一五）　一冊（薄茶色）
A／〇九三　『煎茶早学　上・下』竹軒楽人、青木恒三郎、大正五年第六版刊（一九一六）　二冊（水色）
A／〇九四　『花月庵流方式図譜　煎茶清玩規』坂田圭蔵、泉谷末三郎、大正六年初版刊・大正十二年再版刊（一九二三）　一冊（帙入、白色）
A／〇九五　『一茶庵　清風之巻』佃一茶、一茶菴表池坊家元総務課、昭和二年刊（一九二七）　一冊（濃紺色）
A／〇九六　『松風清社煎茶方式　乾・坤』渡辺虹衣、松風清社、昭和六年刊（一九三一）　二冊（帙入、黄緑色）
A／〇九七　『煎茶秘事記　上・下』有神蜻洲、文雅堂、昭和七年刊（一九三二）　二冊（暗濃緑色）

A／〇九八　『玉川茶寮煎茶法』久我早苗、玉島活版所出版部、昭和八年刊（一九三三）　一冊（薄茶色）

A／〇九九　『炉辺小話』梁瀬量徳、昭和十一年刊（一九三六）　一冊（薄茶色）

A／一〇〇　『煎茶名譜　上・下』木村幽亭、愛茗会本部、昭和十二年刊（一九三七）　二冊（帙入、暗緑色）

A／一〇一　『煎茶道』中島庸介、大雅堂、昭和十八年刊（一九四三）　一冊（薄茶色）

A／一〇二　『煎茶道』中島庸介、芸艸社、昭和二二年刊（一九四七）　一冊（黄色）

A／一〇三　『煎茶茶譚　巻之一』東牛売茶輯、天保十四年癸卯跋（一八四三）、〔写本〕　一冊（白色）

A／一〇四　『画禅堂茶式法　地之巻』田能村直入、〔自筆稿本〕　一冊（青色）

A／一〇五　『清風流烹茶書』花月菴徳鶴翁識、〔写本〕　七冊（帙入、白色）

【B．茗讌図録など】（館蔵品番号：八六四一）

B／〇〇一　『春薦余事』頼立斎、橘屋久兵衛、万延元年跋（一八六〇）　一冊（白色）

B／〇〇二　『春薦余事』頼立斎、橘屋久兵衛、万延元年跋（一八六〇）　一冊（白色）

B／〇〇三　『青湾茶会図録　天・地・人』田能村直入、田能邨氏蔵梓、文久三年刊（一八六三）　三冊（白色）

B／〇〇四　『青湾茶会図録　天・地・人』田能村直入、田能邨氏蔵梓、文久三年刊（一八六三）　三冊（帙入、茶色）

B／〇〇五　『青湾茶会図録　天・地・人』田能村直入、田能邨氏蔵梓、文久三年刊（一八六三）　三冊（薄茶色）

B／〇〇六　『青湾茶会図録　天・地・人』田能村直入、刊記欠・文久三年叙（一八六三）　三冊（帙入、茶色）

B／〇〇七　『青湾茶会図録　天・地・人』田能村直入、田能邨氏蔵梓、文久三年刊（一八六三）　三冊（帙入、白色）

B／〇〇八　『青湾茶会図録　天・地・人』田能村直入、田能邨氏蔵梓、文久三年刊（一八六三）　三冊（薄茶灰色）

B／〇〇九　『青湾茶会図録　天・地・人』田能村直入、須原屋茂兵衛ほか、文久三年刊（一八六三）　三冊（帙入、薄茶色）

B／〇一〇　『青湾茶会図録　天・地・人』田能村直入、須原屋茂兵衛ほか、文久三年刊（一八六三）　三冊（薄茶灰色）

B／〇一一　『青湾茶会図録　天・地・人』田能村直入、須原屋茂兵衛ほか、文久三年刊（一八六三）　三冊（薄茶灰色）

B／〇一二　『熊谷醉香居士追福　書画展観録』奥蘭田〔幹事〕、明治八年乙亥序（一八七五）　一冊（薄茶色）

B／〇一三　『熊谷醉香居士追福　書画展観録』奥蘭田〔幹事〕、明治八年乙亥序（一八七五）　一冊（薄茶色）

B／〇一四　『青湾茗醼図誌　瑞・草・魁・展観録』山中吉郎兵衛、長尾銀治郎、明治九年刊（一八七六）　四冊（帙入、薄茶色）

B／〇一五　『青湾茗醼図誌　瑞・草・魁・展観録』山中吉郎兵衛、北畠茂兵衛ほか、明治九年刊（一八七六）　四冊（帙入、薄茶色）

B／〇一六　『青湾茗醼図誌　瑞・草・魁・展観録』山中吉郎兵衛、北畠茂兵衛ほか、明治九年刊（一八七六）　四冊（帙入、薄茶色）

B／〇一七　『青湾茗醼図誌　瑞・草・魁・展観録』山中吉郎兵衛、北畠茂兵衛ほか、明治九年刊（一八七六）　四冊（帙入、薄茶色）

B／〇一八　『青湾茗醼図誌　瑞・草・魁・展観録』山中吉郎兵衛、北畠茂兵衛ほか、明治九年刊（一八七六）　四冊（帙入、薄茶色）

B／〇一九　『円山勝会図録　巻之上・巻之下・余巻』熊谷九兵衛、明治九年刊（一八七六）　三冊（帙入、薄茶色）

B／〇二〇　『円山勝会図録　巻之上・巻之下・余巻』熊谷直行、明治九年刊（一八七六）　三冊（帙入、黄色）

B／〇二一　『栗渓雅会略誌』牧野静脩・前田真郷、万井藤治郎、明治十一年刊（一八七八）　一冊（茶色）

B／〇二二　『尚古杜多』三田藤光、明治十二年跋（一八七九）　一冊（白色）

B／〇二三　『書画煎茶清楽図録』豊瀬白受跋、明治十二年己卯席題（一八七九）　一冊（薄茶色）

B／〇二四　『遺馨録　上巻・下巻』山本復一跋、明治十三年序（一八七九）　二冊（薄茶色）

B／〇二五　『雲烟供養図録　首巻・上巻・中巻・下巻』杉田三郎助、明治十三年刊（一八八〇）　四冊（帙入、水色）

B／〇二六　『雲烟供養図録　首巻・上巻・中巻』杉田三郎助、明治十三年刊（一八八〇）　三冊（下巻欠、青色）

B／〇二七　『直入翁寿筵図録　天・地・人』田能村順之助、赤志忠七、明治十四年刊（一八八一）　三冊（帙入、薄茶色）

B／〇二八　『春園図録　完』森田弘道跋、明治十四年跋（一八八一）　一冊（薄茶色）

B／〇二九　『追遠薦新図録』奥玄宝、明治十六年刊（一八八三）　一冊（帙入、白色）

B／〇三〇　『分史翁薦事図録　元・亨・利・貞』加嶋信成、小西平兵衛、明治十六年刊（一八八三）　四冊（帙入、茶色）

B／〇三一　『柳嶋清賞』古梅居士跋、明治二十年丁亥跋（一八八七）　一冊（帙入、茶色）

B／〇三二　『随意荘雅集録　上・下』郷純造、明治二二年跋（一八八九）　二冊（帙入、紅色）

B／〇三三　『風月社第壱回煎抹茗筵録　完』田中至義ほか〔幹事〕、明治二五年封面（一八九二）　一冊（薄茶色）

B／〇三四　『墨縁奇賞　春・夏・秋・冬・付録』奥三郎兵衛、明治二六年刊（一

B／〇三五　八九三）　五冊（薄茶色）
『酔花図誌　全』辻多輔・芳賀久一郎、明治二六年刊（一八九三）
一冊（薄茶色）
B／〇三六　『竹洞竹渓翁建碑薦事余録　完』村上和光、藤井孫兵衛、明治二七年刊（一八九四）　一冊（黄緑色）
B／〇三七　『淇水翁薦事図録　松・竹・梅』中埜又左衛門、明治二七年刊（一八九五）　三冊（帙入、白色）
B／〇三八　『老古茗筵図録』中井寅蔵、明治二九年刊（一八九六）　一冊（茶色）
B／〇三九　『清楽欣賞』竹邨氏、明治二九年丙申跋（一八九六）　一冊（外題欠、茶色）
B／〇四〇　『清賞余録　乾・坤』黒川新三郎、明治三一年刊（一八九八）　二冊（薄茶色）
B／〇四一　『万翁華甲醼誌』市河三陽ほか、明治三一年序（一八九八）　一冊（帙入、白色）
B／〇四二　『竹荘茗醼図録』水谷鶴松〔会主〕、明治三二年刊（一八九九）　一冊（帙入、白色）
B／〇四三　『蒹葭堂誌』鹿田静七、鹿田松雲堂、明治三四年刊（一九〇一）
一冊（薄茶色）
B／〇四四　『梅村寿筵図録　乾・坤・生彩・詩』瓜生寅、明治三六年刊（一九〇三）　四冊（帙入、薄茶色）
B／〇四五　『梅村寿筵図録　乾』瓜生寅、明治三六年刊（一九〇三）　一冊（乾巻のみ、薄茶色）
B／〇四六　『林華園薦事図録』林新助、笹川延太郎、明治三六年刊（一九〇三）
一冊（茶色）
B／〇四七　『林華園薦事図録』林新助、笹川延太郎、明治三六年刊（一九〇三）
一冊（茶色）
B／〇四八　『東山茶会図録　東・山・茶・会』岩田嘉兵衛、岩田秋竹堂、明治四一年刊（一九〇八）　四冊（帙入、茶色）
B／〇四九　『第二十回山水清遊会』松原天簫〔会主〕、明治四一年戊申封面（一九〇八）　一冊（薄茶色）
B／〇五〇　『澱江茗醼図録　乾・坤』山中与七ほか、明治四二年刊（一九〇九）
二冊（帙入、薄茶色）
B／〇五一　『澱江茗醼図録　乾・坤』山中与七ほか、明治四二年刊（一九〇九）
二冊（帙入、薄茶色）
B／〇五二　『予章堂茗讌図録　全』阪田圭蔵、松山与兵衛、明治四二年刊（一九〇九）　一冊（薄茶色）
B／〇五三　『直入居士薦事図録　上・下』奥田天門、明治四四年刊（一九一一）
二冊（帙入、薄茶色）
B／〇五四　『雨竹居士薦筵図誌』椰川善左衛門、大正二年刊（一九一三）　二冊（帙入、薄茶色）
B／〇五五　『茶席寿讌図録　上・下』山本祝三、藤井利八、大正五年訂正発行（一九一六）　二冊（薄茶色、明二二印刷）
B／〇五六　『茶席寿讌図録　上』山本祝三、藤井利八、大正五年訂正発行（一九一六）　一冊（上冊のみ、薄茶色）
B／〇五七　『楓川追薦録　春・夏・秋・冬』松井廉、甲津学舎出版部、大正五年刊（一九一五）　四冊（帙入、薄茶色）
B／〇五八　『煎茶小集』椿椿山、風俗絵巻図画刊行会、天保九年序、大正五年再版（一九一六）　一冊（紙箱・帙入、橙色）
B／〇五九　『小西泰山華甲寿筵図録』小西退蔵、大正六年丁巳序（一九一七）
一冊（薄茶色）
B／〇六〇　『悠々居士薦事茗筵記』九鬼健一郎、大正六年封面（一九一七）
一冊（薄茶色）
B／〇六一　『亦復一楽茶会図録』越智武一、大正七年刊（一九一八）　一冊（灰色）
B／〇六二　『渓村翁追薦図録』細谷義一ほか、大正九年序（一九二〇）　一冊（茶色）
B／〇六三　『角山簪篁翁薦事図録　瑞・草・魁』山中簪篁堂、山中吉郎兵衛、大正十一年刊（一九二二）　三冊（帙入、薄茶色）
B／〇六四　『角山簪篁翁薦事図録　瑞・草・魁』山中簪篁堂、山中吉郎兵衛、大正十一年刊（一九二二）　三冊（帙入、薄茶色）
B／〇六五　『角山簪篁翁薦事図録　瑞・草・魁』山中簪篁堂、山中吉郎兵衛、大正十一年刊（一九二二）　三冊（帙入、薄茶色）
B／〇六六　『坂田習軒先生追福茗筵録』大阪通仙社序、昭和三年戊辰序（一九二八）　一冊（薄茶色）
B／〇六七　『高遊会茗讌図録　第一輯・第二輯』篠野治三、やまと雅報写真部、昭和六年（一九三一）　二冊（合本、緑色）
B／〇六八　『欣賞余意』八市堂、〔茗讌出品作の備忘用帳面〕　一冊（薄茶色）

【C．中国茶書・解説書など】（館蔵品番号：八六四二）

C／〇〇一　『品茶要録』黄儒、万暦十三年戊申序（一六〇八）　二冊（二重帙入、薄茶色）
C／〇〇二　『茗笈』屠本畯、万暦三九年序（一六一一）　一冊（赤紫色）
C／〇〇三　『二如亭茶譜　全（二如亭群芳譜利部 第一冊）』王象普、〔天啓元年跋（一六二一）〕　一冊（茶色）
C／〇〇四　『茶史　巻一・巻二』劉源長、康熙十六年丁巳叙（一六七七）　二冊（帙入、薄茶色）
C／〇〇五　『佩文斎広群芳譜』劉灝、康熙四七年序（一七〇八）　四〇冊（六帙入、薄茶色）

C／〇〇六　『続茶経』陸廷燦、寿椿堂、雍正十三年乙卯序（一七三五）　四冊（二重帙入、薄茶色）

C／〇〇七　『百川学海』左圭、上海博古齋、中華民国十年辛酉刊（一九二一）四〇冊（二帙入、紺色）

C／〇〇八　『居家必備　上（一・二・三・四・五巻）・下（六・七・八・九・十巻）』闕名、心遠堂蔵板　十冊（二帙入、白色）

C／〇〇九　『茶経　巻上・巻下』陸羽、春秋館、宝暦八年翻刻（一七五八）二冊（帙入、薄黄色）

C／〇一〇　『茶経　再刻　上・下』陸羽、佐々木平八ほか、宝暦八年刊（一七五八）二冊（帙入、青色）

C／〇一一　『茶経　上・下』陸羽、佐々木惣四郎・林喜兵衛、天保十五年刊（一八四四）　二冊（黄色）

C／〇一二　『茶経詳説　上・下』大典禅師、浅井庄右衛門ほか、安永三年刊（一七七四）　二冊（暗青色）

C／〇一三　『茶経詳説　上・下（合本）』大典禅師、浅井庄右衛門ほか、安永三年刊（一七七四）　一冊（糸取れ、暗青色）

C／〇一四　『茶経詳説　上・下』大典禅師、浅井庄右衛門ほか、安永三年（一七七四）　二冊（外題二種、暗青色）

C／〇一五　『茶経詳説　上・下』大典禅師、佐々木惣四郎・林喜兵衛、安永三年刊（一七七四）　二冊（暗青色）

C／〇一六　『茶経詳説　上・下』大典禅師、佐々木惣四郎・喜兵衛、安永三年刊（一七七四）　二冊（薄茶色）

C／〇一七　『介翁茶史　上・下』劉源長、永楽堂・風月堂、享和三年刊（一八〇三）二冊（薄茶色）

C／〇一八　『茶史　下』劉源長、梶田勘助、享和三年翻刻（一八〇三）〔再版〕一冊（下冊のみ、茶色）

C／〇一九　『考槃余事　一・二・三・四』屠隆、源謙校、慶元堂・金花堂、享和三年刊（一八〇三）　四冊（黄色）

C／〇二〇　『考槃余事　甲・乙・丙・丁』屠隆、源謙校、享和三年癸亥跋（一八〇三）〔再版〕　四冊（帙入、薄茶色）

C／〇二一　『茶集　上・中・下』喩政編、源靖重訂、林伊兵衛ほか、文化元年甲子跋（一八〇四）　三冊（帙入、黄色）

C／〇二二　『枕山楼茶略　完』陳元輔、〔清廬蔵、文化二年乙丑刊（一八〇五）〕一冊（黄色）

C／〇二三　『茶略　全』陳元輔、白頭社ほか（執事）、明治三年刊（一八七〇）一冊（薄茶色）

C／〇二四　『茶略　全』陳元輔、白頭社ほか（執事）、明治三年刊（一八七〇）一冊（薄茶色）

C／〇二五　『茶経煮茶法解』曾漸、娑々木惣四郎、弘化三年序（一八四六）一冊（薄茶色）

C／〇二六　『茶経煮茶法解』曾漸、〔刊記なし〕、弘化三年序（一八四六）　一冊（薄茶色）

C／〇二七　『煎茶訣』葉雋、小田善右衛門、明治十二年刊（一八七九）　一冊（薄茶色）

【D．茶の湯関連書籍など】（館蔵品番号：八六四三）

D／〇〇一　『喫茶養生記』栄西禅師、銭屋四郎兵衛ほか、元禄七年甲戌刊（一六九四）　一冊（薄茶色）

D／〇〇二　『喫茶養生記』栄西禅師、柳枝軒 小川多左衛門、〔元禄七年甲戌の再版〕　一冊（青色）

D／〇〇三　『喫茶養生記』栄西禅師、友松堂 小川源兵衛、〔明治期の再版〕一冊（暗藍色）

D／〇〇四　『古今茶湯諸抄大成　一・二・三・四・五・六』（三谷友佐撰）、永田調兵衛、正徳三年刊（一七一三）　六冊（帙入、薄水色）

D／〇〇五　『古今茶湯諸抄大成 茶録 図入 乾・坤』（三谷友佐撰）、〔正徳三年刊（一七一三）〕　二冊（帙入、薄茶色）

D／〇〇六　『和漢茶誌 全（上・中・下）』三谷南川（宗鎮）、享保十三年戊申刊（一七二八）　三冊（帙入、茶色）

D／〇〇七　『茶事談』南秀女、西村一郎右衛門ほか、宝暦十年刊（一七六〇）二冊（薄青色）

D／〇〇八　『茶具備討集』一漚軒宗金、須原屋茂兵衛、享和二年刊（一八〇二）一冊（版型小、水色）

D／〇〇九　『茶具備討集　全』一漚軒宗金、須原屋茂兵衛、享和二年刊（一八〇二）　一冊（版型大、水色）

D／〇一〇　『茶旨略　全』速水宗達、石田治兵衛、文化八年刊（一八一一）一冊（淡茶灰色）

D／〇一一　『茶旨略　全』速水宗達、石田治兵衛、文化八年刊（一八一一）一冊（淡茶灰色）

D／〇一二　『群書類従　（四六八）・三六八』（四頁分乱丁）、塙保己一編、〔文政三年跋（一八二〇）〕　一冊（薄茶色）

D／〇一三　『古能免之説』前田夏蔭、尚友堂岡村庄助、文政十二年刊（一八二九）一冊（橙色）

D／〇一四　『古能免之説』前田夏蔭、尚友堂岡村庄助、文政十二年刊（一八二九）一冊（橙色）

D／〇一五　『喫茶余録　二編下』香実老人（深田正韻）、前田夏、天保六年刊（一八三五）　一冊（一冊のみ、薄青色）

D／〇一六　『茶事心教弁　全』吉祥道閑、明治十五年刊（一八八二）　一冊（濃紺色）

D／〇一七　『茶種将来七百五十年記念　喫茶小話』松本忠義、昭和九年刊（一九三四）　一冊（茶色）

D／〇一八　『茶譜　器物部』巌翁筆、宝永五年写（一七〇八）、〔写本〕　一冊（白色）

【E．製茶書など】（館蔵品番号：八六四四）

E／〇〇一　『製茶図解』彦根藩序、明治四年序（一八七一）　一冊（黄色）

E／〇〇二　『製茶新説　前編　全』増田充績編、須原屋茂兵衛ほか、明治六年序（一八七三）　一冊（前編のみ、黄色）

E／〇〇三　『茶園栽培問答　全』成川尚義序、明治七年封面（一八七四）　一冊（緑色）

E／〇〇四　『紅茶製法書　全』安田成裕、明治七年跋（一八七四）　一冊（茶色）

E／〇〇五　『茶業必要　上・下』上林熊治郎・江口高廉、明治十年刊（一八七七）　二冊（黄色）

E／〇〇六　『茶製一覧』明治十年巻末（一八七七）　一冊（薄茶色）

E／〇〇七　『茶務僉載　完』胡秉枢、穴山篤太郎、明治十年序（一八七七）　一冊（帙入、薄茶色）

【F．煎茶人・文人・儒者関連書籍など】（館蔵品番号：八六四五）

F／〇〇一　『漁樵酒茶　四詠唱和』陸亀蒙・皮日休、和泉屋金右衛門、文化七年校（一八一〇）　一冊（帙入、薄茶色）

F／〇〇二　『漁樵酒茶　四詠唱和』陸亀蒙・皮日休、英平吉、文化八年刊（一八一一）　一冊（黄色）

F／〇〇三　『真山民詩集』真山民撰、勝村治右衛門ほか、文化九年序（一八一二）　一冊（薄茶色）

F／〇〇四　『咏茶詩録　一・二・三・四』柳湾編、岡田屋嘉七ほか、天保十年己亥跋（一八三九）　四冊（帙入、薄茶色）

F／〇〇五　『咏茶詩録　一・二』柳湾編、〔天保十年己亥跋（一八三九）〕　二冊（二冊のみ、薄茶色）

F／〇〇六　『明霞先生遺稿　一、二・三、四・五、六、七・八』宇野明霞（鼎）、田原重兵衛、寛延元年刊（一七四八）　五冊（薄茶色）

F／〇〇七　『貝尽浦の錦　上・下』大枝流芳、西村源六ほか、寛延四年刊（一七五一）　二冊（帙入、青色）

F／〇〇八　『雅遊漫録　壹・二・三・四・五・六・七』大枝流芳、渋川清右衛門ほか、宝暦十三年刊（一七六三）　七冊（帙入、青色）

F／〇〇九　『売茶翁偈語』売茶翁高遊外、友松堂 小川源兵衛、宝暦十三年癸未跋（一七六三）　一冊（薄茶色）

F／〇一〇　『売茶翁偈語』売茶翁高遊外、花月菴、宝暦十三年成（一七六三）〔再版〕　一冊（再刊、茶色）

F／〇一一　『売茶翁茶器図　全』木村孔陽、文政六年癸未跋（一八二三）　一帖（帙入、黄色）

F／〇一二　『売茶翁茶器図　全』田中楢治郎再版、泉谷末三郎、大正十三年刊（一九二四）〔再版〕　一帖（再版、黄色）

F／〇一三　『秋苑日渉　一・二・三・四・五・六・七・八・九・十・十一・十二』村瀬嘉右衛門（栲亭）、林伊兵衛ほか、文化四年刊（一八〇七）　十二冊（帙入、茶色）

F／〇一四　『蒹葭堂雑録　一・二・三・四・五』曉晴翁撰、山田茂助、安政三年序（一八五九）　五冊（茶色格子）

F／〇一五　『山陽先生題跋　全』児玉慎輯録、田中太右衛門ほか、明治十二年刊（一八七九）　一冊（青色）

F／〇一六　『花月庵鶴翁小伝』田中楢治郎、昭和二年刊（一九二七）　一冊（茶色）

F／〇一七　『楓川画集　上・下』松井廉、大正九年刊（一九二〇）　二冊（帙入、茶色）

F／〇一八　『近世畸人伝　一・二・三・四・五』伴蒿蹊、菱屋孫兵衛ほか、寛政二年刊（一七九〇）　五冊（帙入、茶色）

F／〇一九　『続近世畸人伝　一・二・三・四・五』伴蒿蹊、林伊兵衛ほか、寛政十年刊（一七九八）　五冊（帙入、茶色）

F／〇二〇　『近世叢語　一・二・三・四、五・六、七・八』角田九華、岡田屋嘉七ほか、文政十一年刊（一八二八）　四冊（青色）

F／〇二一　『続近世叢語　一・二・三・四、五・六、七・八』角田九華、出雲寺文次郎ほか、弘化二年序（一八四五）　四冊（青色）

F／〇二二　『東洞先生遺稿　上・中・下』吉益東洞、出雲寺文次郎ほか、寛政十二年刊（一八〇〇）　三冊（薄茶色）

F／〇二三　『名家略伝　一・二・三・四』山崎美成、英屋文蔵、天保十三年刊（一八四二）　四冊（灰色）

F／〇二四　『雲烟略伝　上・下』清宮秀堅、玉山堂、明治七年刊（一八七四）　一冊（黄色）

F／〇二五　『雲烟略伝　全』清宮秀堅、風俗絵巻図画刊行会、大正八年刊（一九一九）〔再版〕　一冊（薄茶色）

F／〇二六　『七石荘茶話　第一編　近世雅人伝　上・中・下』湯川玄洋、昭和五年刊（一九三〇）　三冊（帙入、白色）

F／〇二七　『売茶翁』福山朝丸編、三浦良吉、昭和九年刊（一九三四）　二冊（帙入、赤茶色

F／〇二八　『東野遺稿　上・中・下』竹村東野、小林新兵衛、寛延二年刊（一七四九）　三冊（帙入、薄茶色）

F／〇二九　『先哲叢談　序目年表』東條耕子、河内屋茂兵衛ほか、文政十年序（一八二七）　一冊（茶色）

F／〇三〇　『先哲叢談　自一至二、自三至四、自五至六、自七至八』原三右衛門、植村藤右衛門ほか、文化十三年刊（一八一六）　四冊（黒色）

F／〇三一　『先哲叢談後編　自一至二、自三至四、自五至六、自七至八』東條耕子、植村藤右衛門ほか、文政十二年刊（一八二九）　四冊（茶色）

F／〇三二　『先哲叢談続編　一・二・三・四・五・六』東條耕子、北畠茂兵衛、明治十七年刊（一八八四）　六冊（茶色）

F／〇三三　『売茶翁之記』暁庵老人筆、〔写本〕　一冊（茶色）

F／〇三四　『真山遺稿　七律』〔写本〕　一冊（薄茶色）

【G．黄檗宗・禅僧関連書籍など】（館蔵品番号：八六四六）

G／〇〇一　『普照国師年譜　上下』貝葉書院、寛永六年成（一六二九）〔再版〕　一冊（茶色）

G／〇〇二　『黄檗木庵和尚年譜　上下』南岳道宗編集、其中堂、元禄八年跋（一六九五）〔再版〕　一冊（茶色）

G／〇〇三　『黄檗清規　全』木庵禅師、貝葉堂　印房武兵衛、寛文十二年壬子序（一六七二）〔再版〕　一冊（表紙・糸欠）

G／〇〇四　『大円広慧国師紀年録』道祐編録、宝永二年序（一七〇五）、昭和七年跋〔再版〕　一冊（茶色）

G／〇〇五　『松浦詩集　巻之上・巻之中・巻之下』大潮禅師、山本平左衛門ほか、元文五年（一七四〇）　三冊（薄茶色）

G／〇〇六　『魯寮詩偈　完』大潮禅師、延享元年序（一七四四）　一冊（薄茶色）

G／〇〇七　『魯寮詩偈　完』大潮禅師、尚古堂　田中甚兵衛、延享元年序（一七四四）　一冊（薄茶色）

G／〇〇八　『魯寮詩偈　完』大潮禅師、尚古堂　田中甚兵衛、延享元年序（一七四四）　一冊（薄茶色）

G／〇〇九　『魯寮文集　上・下』大潮元皓、延享元年序（一七四四）　二冊（薄茶色）

G／〇一〇　『無隠禅師無孔笛　一之二、三之四、五之六』無隠禅師、延享元年刊（一七四四）　三冊（白色）

G／〇一一　『無隠禅師無孔笛　一之二、三之四、五之六』無隠禅師、著屋儀兵衛、延享元年刊（一七四四）　三冊（薄茶色）

G／〇一二　『無隠和尚雑華集　一之二、三之四、五之六』無隠禅師、田中甚兵衛ほか、宝暦十年刊（一七六〇）　三冊（薄茶色）

G／〇一三　『金龍尺牘集　上・下』無隠禅師、小川多左衛門ほか、宝暦四年刊（一七五四）　二冊（薄茶色）

G／〇一四　『祇林詩裁　祇林聯芳』金龍道人撰、小幡宗左衛門、宝暦十二年刊（一七六二）　一冊（薄青色）

G／〇一五　『蘭陵禅師草庵稿　巻上・巻下』蘭陵禅師、額田正三郎、明和七年刊（一七七〇）　二冊（帙入、薄緑色）

G／〇一六　『小雲棲手簡　上・下』大典禅師、近江屋庄右衛門、安永六年刊（一七七七）　二冊（藍色）

G／〇一七　『小雲棲手簡　上・下　二編』大典禅師、近江屋庄右衛門、天明七年刊（一七八七）　二冊（暗藍色）

G／〇一八　『小雲棲手簡　上・下　三編』大典禅師、近江屋庄右衛門ほか、寛政六年刊（一七九四）　二冊（藍色）

G／〇一九　『小雲棲手簡　四編　全』大典禅師、近江屋庄右衛門・須原屋伊八、寛政七年刊（一七九五）　一冊（藍色）

G／〇二〇　『小雲棲詠物詩　巻上・巻下』大典禅師、松月堂、寛政二年刊（一七九〇）　二冊（白色）

G／〇二一　『小雲棲稿』大典禅師、寛政八年刊（一七九六）　六冊（帙入、薄茶色）

G／〇二二　『北禅文草　一・二、三・四』大典禅師、近江屋庄右衛門ほか、寛政四年刊（一七九二）　二冊（薄茶色）

G／〇二三　『北禅詩草　一・二・三・四・五・六』大典禅師、須原屋伊八、寛政五年刊（一七九三）　六冊（帙入、薄茶色）

G／〇二四　『北禅遺草　一・二、三・四、五・六、七・八』大典禅師、須原屋伊八ほか、文化四年刊（一八〇七）　四冊（帙入、薄茶色）

G／〇二五　『六如庵詩鈔　一之二、三之四、五之六』慈周、山崎金兵衛ほか、天明三年刊（一七八三）　三冊（薄茶色）

G／〇二六　『六如庵詩鈔　二編』慈周、唐本屋新右衛門ほか、寛政九年刊（一七九七）　三冊（薄茶色）

G／〇二七　『南屏燕語　乾・坤』古梁禅師、河合卯之助、天保二年成、明治二一年刊（一八八八）　二冊（黄色）

G／〇二八　『一雨餘稿　上・下』悟心禅師、菱屋孫兵衛ほか、安永二年刊（一七七三）　二冊（白色）

G／〇二九　『一雨餘稿　乾・坤』悟心禅師著、笑堂河孝筆、大正十三年写（一九二四）、〔写本〕　二冊（灰色）

G／〇三〇　『一雨文抄』悟心禅師著、暁庵筆、昭和十二年写（一九三七）、〔写本〕　一冊（茶色）

G／〇三一　『一雨詩偈　上・下』悟心禅師著、暁庵筆、昭和十六年写（一九四一）、〔写本〕　二冊（薄茶色）

G／〇三二　『金龍尺牘集　巻之上・巻之下』予章天山編、〔安永六年成（一七七

七）〕、〔写本〕　一冊（茶色）
G／〇三三　『金龍尺牘集　巻之上・巻之下』越法編、〔写本〕　二冊（茶色）
G／〇三四　『海雲第一代　百拙禅師行状』〔写本〕　一冊（茶色）

【H．辞書類・随筆・文学・その他】（館蔵品番号：八六四六）

H／〇〇一　『五雑組　一・二、三・四、五・六、七・八、九・十、十一・十二、十三・十四、十五・十六』謝肇淛撰、寛文元年刊（一六六一）　八冊（薄茶色）
H／〇〇二　『五雑組　一・二・三・四・五・六・七・八』謝肇淛撰、中川藤四郎ほか、寛文元年刊（一六六一）、寛政七年補刻（一七九五）　八冊（青色）
H／〇〇三　『和漢三才図絵　巻三十一庖厨具・巻三十二家飾具』寺島良安、〔正徳五年跋（一七一五）〕　一冊（一冊のみ、紺色）
H／〇〇四　『錦字箋　巻四』黄溪、須原屋茂兵衛ほか、文政十一年翻刻（一八二八）・嘉永元年改発（一八四八）　一冊（巻四のみ、薄茶色）
H／〇〇五　『太平楽府』多和井茂内、只見屋調助ほか、明和六年己丑序（一七六九）　一冊（薄茶）
H／〇〇六　『清俗紀聞　第一・第二・第三・第四・第五・第六』中川忠英、堀野屋仁兵衛、寛政十一年刊（一七九九）　六冊（帙入、黄色）
H／〇〇七　『閑田耕筆　一・二・三・四』伴蒿蹊、林伊兵衛ほか、享和元年刊（一八〇一）　四冊（下と帙入、青色）
H／〇〇八　『閑田次筆　一・二・三・四』伴蒿蹊、林伊兵衛ほか、文化三年刊（一八〇六）　四冊（上と帙入、白色）
H／〇〇九　『閑田文章　壹・貳・参・駟・伍』伴蒿蹊、今津屋辰三郎ほか、享和三年刊（一八〇三）　五冊（帙入、黄色）
H／〇一〇　『睡余小録　乾・坤』河津吉迪（山白散人）編、西田小三郎ほか、文化四年（一八〇七）　二冊（白色に梅模様）
H／〇一一　『燕石雑志　壹・貳・参・肆・伍・陸』蓑笠翁（滝沢馬琴）、和泉屋平吉ほか、文化七年刊（一八一〇）　六冊（黒色模様）
H／〇一二　『良山堂茶話　一・二』阿部温、文政七・十一年刊（一八二四・一八二八）　二冊（黄色）
H／〇一三　『雲錦随筆　春・夏・秋・冬』曉晴翁、丁子屋平兵衛ほか、文久二年刊（一八六二）　四冊（茶色縞）
H／〇一四　『歌狂　古今畸人画像集　全』芯蒭園草業撰、河内屋喜兵衛ほか　一冊（帙入、水色）
H／〇一五　『狂歌恵比須艸　全』葵岡北溪画　一冊（暗褐色）
H／〇一六　『狂歌茶器財（画像）集』清流亭西江〔会主〕、安政二年巻末（一八五五）　一冊（帙入、薄茶色）
H／〇一七　『風俗文選　六、七・八、九』五老井（森川）許六、今古堂、〔宝永三年（一七〇六）〕　三冊（青色）
H／〇一八　『養生訓　一ノ二、三ノ四、五ノ六、七ノ八』貝原益軒（篤信）、永田調兵衛、正徳三年刊（一七一三）　四冊（帙入、青色）
H／〇一九　『貝原養生訓　一・二、三・四、五・六、七・八』貝原益軒（篤信）、多田勘兵衛、正徳三年成、文化九年刊（一八一二）　四冊（薄青色）
H／〇二〇　『貝原養生訓　一・二、三・四、五・六、七・八』貝原益軒（篤信）、多田勘兵衛、正徳三年成、文化九年刊（一八一二）　四冊（薄青色）
H／〇二一　『養生法　全』松本良順著・山内豊城注、島村利助、元治元年跋（一八六四）　一冊（薄青色）
H／〇二二　『艸堂雑録　一・二・三・四』光謙、東叡山浄名律院藏版、享保十四年序（一七二九）　四冊（帙入、薄茶色）
H／〇二三　『野山名霊集　第一・第二・第三・第四・第五』泰円、伊右衛門、宝暦二年壬申（一七五二）　五冊（紫色）
H／〇二四　『順礼歌要解　西国三十三所　上巻』宝暦十一年序（一七六一）、〔再版〕一冊（黄色）
H／〇二五　『絵詞要略　誓願寺縁起　下』慧明、誓願寺蔵版、寛政四年跋（一七九二）　一冊（黄色）
H／〇二六　『毘沙門天王霊験記　四』恭道編、〔文化九年刊（一八一二）〕　一冊（灰色）
H／〇二七　『四国遍礼道指南増補大成』宥辨、糸屋七五郎求、文化十二年刊（一八一五）　一冊（灰色）
H／〇二八　『多武峰縁起　破裂記附録』一条兼良、天保十一年庚子跋（一八四〇）一冊（薄紫色）
H／〇二九　『大阿羅漢図讃集　第一・第二・第三』徹定撰、文久三年壬戌序（一八六三）　三冊（黄色）
H／〇三〇　『拳会角力図会　上・下』義浪・吾崔編、村田屋治郎兵衛ほか、文化六年刊（一八〇九）　二冊（青色模様）
H／〇三一　『扁額軌範　初篇・二篇上・二篇中・二篇下・附録』合川珉和・北川春成画、大谷仁兵衛、〔文政二年序、明治期の再版〕　五冊（木箱入、薄茶色）

合計：三二四件
以　上

谷村為海煎茶研究資料リスト

凡例

・リストの作品は、枝番号、書籍名称、著者・編者、出版元、刊行年ほか、員数、〇内は表紙の色など　の順に記した

・書籍名称については、基本的には題箋や封面、内題などを参照して命名した。

1．谷村為海氏製作複製本

（蔵書印は消しているものが多い。現蔵本は蔵書目録などからの情報。）

【J．煎茶書など】（館備品資料番号：〇〇六〇）

J／〇〇一　『梅山種茶譜略』売茶翁高遊外、霊著軒・正始館、延享五年成、宝暦五年刊（一八三八）　一冊（青色、駒澤大学図書館蔵本）

J／〇〇二　『梅山種茶譜略』売茶翁高遊外、高山寺知蔵、延享五年成、天保九年刊（一八三八）　一冊（赤茶色、谷村氏蔵本）

J／〇〇三　『青湾茶話　上・下・付録』大枝流芳、渋皮清右衛門ほか、宝暦六年刊（一七五六）　三冊（茶色、谷村氏蔵本）

J／〇〇四　『考茶録　全（煎茶早指南）』歌口、安永八年序（一七七九）　一冊（茶色、谷村氏蔵本）

J／〇〇五　『清風瑣言　上・下』上田秋成、中川藤四郎ほか、寛政六年刊（一七九四）　二冊（白色、谷村氏蔵本）

J／〇〇六　『煎茶略説　全』沢田楽水居、寛政十年戊午跋（一七九八）　一冊（灰白色、谷村氏蔵本）

J／〇〇七　『烹茶樵書　茶寮図賛附刻』曽占春・大窪詩仏、前川弥兵衛、享和三年癸亥序（一八〇三）　一冊（薄黄緑色、東北大学図書館蔵本・狩野文庫）

J／〇〇八　『煎茶式　全』隠君雪斎（増山雪斎）、尚古斎蔵板、文化元年跋（一八〇四）　一冊（茶色、東北大学図書館蔵本・狩野文庫）

J／〇〇九　『茶史』真間人（豊田甚右衛門旁訳）、文化五年戊辰跋（一八〇八）　一冊（茶色、東北大学図書館蔵本・狩野文庫）

J／〇一〇　『淹茶式　全』自適窩主人、文政二年刊（一八一九）　一冊（薄黄褐色、個人蔵本）

J／〇一一　『泡茶新書三種』田能村竹田、〔図譜奥付：河内屋吉兵衛、天保二年刊（一八三一）〕「石山齋茶具図譜」「竹田荘泡茶訣」「竹田荘茶説」合冊改題）　三冊（薄黄色、谷村氏蔵本）

J／〇一二　『竹田自筆　泡茶訣』田能村竹田、竹苞楼、文政十二年己丑跋（一八二九）〔再刊〕　一冊（白色、谷村氏蔵本）

J／〇一三　『竹田自筆　僊窠譜　完』田能村竹田、豊後吉川氏蔵梓、嘉永三年庚戌封面（一八五〇）　〔「竹田荘泡茶訣」「石山齋茶具図譜」「竹田荘蔵茶具三鑵図」合冊改題）　一冊（白色、個人蔵本）

J／〇一四　『煎茶小述』山本徳潤、小林新兵衛、〔天保六年（一八三五）初版、明治以降の再版〕　一冊（緑色、谷村氏蔵本）

J／〇一五　『喫茗新語　一・二・三・四・五・六・附言』来化亭隠士、天保八年叙（一八三七）　七冊（薄黄色、内閣文庫蔵本・浅草文庫）

J／〇一六　『喫茗新語　上・中・下』来化亭隠士、天保八年叙（一八三七）　三冊（薄黄色、東北大学図書館蔵本・狩野文庫）

J／〇一七　『新撰煎茶一覧』清談楼主人、須原屋茂兵衛ほか、弘化四年刊（一八四七）　一冊（青色、大阪府立中之島図書館蔵本）

J／〇一八　『煎茶手引之種　全』山本主人（徳潤）、河内屋喜兵衛ほか、嘉永元年（一八四八）　一冊（薄緑色、谷村氏蔵本）

J／〇一九　『木石居煎茶訣　乾・坤』深田精一、永楽屋東四郎、嘉永二年己酉序（一八四九）　二冊（薄黄褐色、谷村氏蔵本）

J／〇二〇　『清風煎茶要覧　全』東園、越後屋治兵衛ほか、嘉永四年刊（一八五一）　一冊（茶色、谷村氏蔵本）

J／〇二一　『煎茶図式』今村了菴、慶応元年後序（一八六五）　一冊（朱色、谷村氏蔵本）

J／〇二二　『淹茶小録』太田秉、氷清茶寮、慶応三年丁卯封面（一八六七）　一冊（白色、谷村氏蔵本）

J／〇二三　『銕荘茶譜　陳列之部・瓷壺之部』富岡鉄斎、竹苞書楼・蕉陰艸堂、慶応三年丁卯序（一八六七）　二冊（薄茶色、谷村氏蔵本）

J／〇二四　『茗壺図録　乾・坤』奥三郎兵衛、隈三堂ほか、明治九年刊（一八七六）　二冊（薄茶色、谷村氏蔵本）

J／〇二五　『品茶譜』柚木梶雄編輯、久我早苗、明治二八年刊（一八九五）　一冊（白色、谷村氏蔵本）

J／〇二六　『酒餅論』徳富猪一郎、成簀堂叢書、民友社、大正三年刊（一九一四）、〔再刊〕　一冊（緑色、個人蔵本）

J／〇二七　『沙園煎茶規　完』田近岩彦、熊谷鳩居堂、大正四年刊（一九一五）　一冊（白色、谷村氏蔵本）

J／〇二八　『煎茶秘事記　上・下』有神蜻洲、文雅堂、昭和七年刊（一九三二）　二冊（暗濃緑色、谷村氏蔵本）

J／〇二九　『煎茶纂要』塚原簡子輯、〔稿本〕　一冊（茶色、東京都立中央図書館蔵書・加賀文庫）

J／〇三〇　『酒餅伊呂波論義』　一冊（茶色、個人蔵本）

J／〇三一　『独健帖　一・二・三・四・五・七・九・十・十二・十三』〔八橋売

茶〕、文化二～文政九年（一八〇五～一八二六）〔写本〕　十冊（青色・薄茶色）

J／〇三二　『煎茶茶譚　巻之一』東牛売茶輯、天保十四年癸卯跋（一八四三）、〔写本〕　一冊（薄緑色、谷村氏蔵本）

J／〇三三　『頑僊流淹茶盆手前順序　附銹之図』蘆中庵茶侠、大正六年丁巳（一九一七）、〔写本〕　一冊（緑色）

J／〇三四　『品茶録』春琴先生、〔自筆本〕　一冊（黄色、大阪府立中之島図書館蔵本）

J／〇三五　『画禅堂茶式法　地之巻』田能村直入、〔自筆稿本〕　一冊（茶色、谷村氏蔵本）

J／〇三六　『宇治高遊外伝来大坂梅樹軒　煎茶艸手前指南記』東牛売茶、〔自筆稿本〕　一冊（茶色、個人蔵本）

【K．茗讌図録など】（館資料番号：〇〇六一）

K／〇〇一　『栗渓雅会略誌』牧野静脩・前田真郷、万井藤治郎、明治十一年刊（一八七八）　一冊（白色、谷村氏蔵本）

K／〇〇二　『深志茗讌図録　乾・坤』竹内禎十郎、須原鉄二ほか、明治十三年刊（一八八〇）　二冊（白色、個人蔵本）

K／〇〇三　『春園図録　完』森田弘道跋、明治十四年跋（一八八一）　一冊（白色、谷村氏蔵本）

K／〇〇四　『風月社第壱回煎抹茗筵録　完』田中至義ほか〔幹事〕、明治二五年封面（一八九二）　一冊（白色、谷村氏蔵本）

K／〇〇五　『清楽欣賞』竹邨氏、明治二九年跋（一八九六）　一冊（外題欠、茶色、谷村氏蔵本）

K／〇〇六　『煎茶小集』椿椿山、風俗絵巻図画刊行会、天保九年序、大正五年再版（一九一六）　一冊（薄茶色、谷村氏蔵本）

K／〇〇七　『悠々居士薦事茗筵記』九鬼健一郎、大正六年封面（一九一七）　一冊（白色、谷村氏蔵本）

【L．中国茶書・解説書など】（館備品資料番号：〇〇六二）

L／〇〇一　『品茶要録』黄儒、万暦十三年戊申序（一六〇八）　二冊（白色、谷村氏蔵本）

L／〇〇二　『二如亭茶譜　全（二如亭群芳譜利部　第一冊）』王象晋、〔天啓元年跋（一六二一）〕　一冊（茶色、谷村氏蔵本）

L／〇〇三　『茶董補』陳継儒、海山仙館叢書、道光二七年丁未封面（一八四七）　一冊（茶色、東北大学図書館蔵本）

L／〇〇四　『茶経』陸羽、明陳文燭玉叔選輯、〔明版〕　一冊（灰黄緑色、大阪府立中之島図書館蔵本）

L／〇〇五　『茶譜』顧元慶、〔抄本、上記明版茶経の茶譜部分〕　一冊（灰黄緑色、大阪府立中之島図書館蔵本）

L／〇〇六　『茶集』喩政編、〔明版〕　一冊（灰黄緑色、大阪府立中之島図書館蔵本）

L／〇〇七　『宣和北苑貢茶録　全』熊蕃、読画齋叢書　辛集　一冊（赤茶色、東北大学図書館蔵本・狩野文庫）

L／〇〇八　『佩文齋広群芳譜　巻第十八・十九、巻第二十・二十一』　二冊（薄茶色、谷村氏蔵本）

L／〇〇九　『説郛』〔抄本〕、商務印書館、中華民国十六年刊（一九二七）　一冊（抄本、緑色）

L／〇一〇　『茶録　茶具図賛　全』蔡襄、〔古今茶湯諸抄大成より、正徳三年（一七一三）〕　一冊（青色、大阪府立中之島図書館蔵本）

L／〇一一　『夏氏三種　茶董　上・下』夏樹芳、日野屋源七・能登屋次助、宝暦八年刊（一七五八）　二冊（黄土色、東北大学図書館蔵本・狩野文庫）

L／〇一二　『煎茶訣　全』葉雋、宝暦十四年甲申跋（一七六四）、〔浪華叢書巻四摂陽奇談より〕　一冊（薄緑色）

L／〇一三　『煎茶訣　完』葉雋、草魁園、天保九年戊戌跋（一八三八）　一冊（薄茶色、個人蔵本）

L／〇一四　『煎茶訣』葉雋、小田善右衛門、明治十二年刊（一八七九）　一冊（薄茶色、谷村氏蔵本）

L／〇一五　『文房図賛』・『文房図賛続　附十友図賛』林洪・羅先登・顧元慶、河内屋直助、寛政六年刊（一七九四）　二冊（黄緑色、東北大学図書館蔵本・狩野文庫）

L／〇一六　『介翁茶史　上・下』劉源長、永楽堂・風月堂、享和三年完（一八〇三）　二冊（茶色、谷村氏蔵本）

L／〇一七　『茶集　上・中・下』喩政編、源靖重訂、林伊兵衛ほか、文化元年甲子跋（一八〇四）　三冊（黄色、谷村氏蔵本）

L／〇一八　『漁樵酒茶　四詠唱和』陸亀蒙・皮日休、和泉屋金右衛門、文化七年校（一八一〇）　一冊（薄茶色、谷村氏蔵本）

L／〇一九　『茶経煮茶法解』曾漸、娑々木惣四郎、弘化三年序（一八四六）　一冊（薄茶色、谷村氏蔵本）

L／〇二〇　『枕山楼茶略　全』陳元輔、白頭社ほか（執事）、明治三年刊（一八七〇）　一冊（茶色、谷村氏蔵本）

L／〇二一　『虎丘茶経注補　全』陳鑑、〔日本での翻刻〕　一冊（青色、東北大学図書館蔵本・狩野文庫）

L／〇二二　『石公茶譜　考槃余事茶箋之部』、〔写本〕　一冊（黒色、東北大学図書館蔵本・狩野文庫）

【M．茶の湯関連書籍など】（館備品資料番号：〇〇六三）

M／〇〇一　『庖厨備用和名本草　巻之十三（十二）』（乱丁本）、木貞順庵、小野善兵衛ほか、貞享元年刊（一六八四）、〔八頁まで乱丁、叙などは「巻之一・質疑」からの補填〕　一冊（青色、個人蔵本、）

M／〇〇二　『喫茶養生記』栄西禅師、銭屋四郎兵衛ほか、元禄七年甲戌刊（一六九四）　一冊（茶色、谷村氏蔵本）

M／〇〇三　『喫茶養生記』栄西禅師、友松堂　小川源兵衛、〔明治期の再版〕　一冊（青色、谷村氏蔵本）

M／〇〇四　『和漢茶誌　全（上・中・下）』三谷南川（宗鎮）、享保十三年戊辰刊（一七二八）　三冊（茶色、谷村氏蔵本）

M／〇〇五　『茶具備討集　全』一漚軒宗金、須原屋茂兵衛、享和二年刊（一八〇二）　一冊（緑色、谷村氏蔵本）

M／〇〇六　『茶茗功能記　上・下』翠中軒知新、享和三年跋（一八〇三）、〔写本〕　二冊（茶色、東北大学図書館蔵本・狩野文庫）

M／〇〇七　『茶旨略　全』速水宗達、石田治兵衛、文化八年刊（一八一一）　一冊（白色、東北大学図書館蔵本・狩野文庫）

M／〇〇八　『群書類従　三六八　（喫茶養生記・喫茶録ほか）』塙保己一編、〔文政三年跋（一八二〇）、巻三六五（大阪府立中之島図書館蔵本）で最初の四頁分補填〕　一冊（薄茶色、谷村氏蔵本）

M／〇〇九　『古能免之説』前田夏蔭、尚友堂岡村庄助、文政十二年刊（一八二九）　一冊（茶色、谷村氏蔵本）

M／〇一〇　『木芽説』〔日本随筆大成より〕　一冊（白色）

M／〇一一　『賞茶或問　全』磯辺忠貫、墾玉堂、嘉永四年序（一八五一）　一冊（黄緑色、東北大学図書館蔵本・狩野文庫）

M／〇一二　『茶記贅言　全』岡部葛根、毘婁華蔵、嘉永六年跋（一八五三）　一冊（黄緑色、東北大学図書館蔵本・狩野文庫）

M／〇一三　『茶勲』津田養、〔自筆稿本〕　一冊（赤茶色、東北大学図書館蔵本・狩野文庫）

M／〇一四　『茶譜　器物部』巌翁筆、宝永五年写（一七〇八）、〔写本〕　一冊（白色、谷村氏蔵本）

【N．製茶書など】（館備品資料番号：〇〇六四）

N／〇〇一　『製茶図解』彦根藩序、明治四年序（一八七一）　一冊（黄色、谷村氏蔵本）

N／〇〇二　『製茶新説　前編　全』増田充績編、須原屋茂兵衛ほか、明治六年序（一八七三）　一冊（黄色、谷村氏蔵本）

N／〇〇三　『茶園栽培問答　全』成川尚義序、明治七年封面（一八七四）　一冊（緑色、谷村氏蔵本）

N／〇〇四　『茶務僉載　完』胡秉枢、穴山篤太郎、明治十年序（一八七七）　一冊（白色、谷村氏蔵本）

N／〇〇五　『茶業必要　上・下』上林熊次郎・江口高廉、山中市兵衛、明治十年刊（一八七七）　一冊（黄土色、谷村氏蔵本）

【P．煎茶人・文人・儒者関連書籍など】（館備品資料番号：〇〇六五）

P／〇〇一　『先哲叢談　序目年表』東條耕子、河内屋茂兵衛ほか、文政十年序（一八二七）　一冊（緑色、谷村氏蔵本）

P／〇〇二　『対客言志』高遊外筆、明治十七年甲申序（一八八四）、〔自筆巻の写真複製本〕　一冊（臼黄色、清澄寺蔵品）

P／〇〇三　『対客言志』高遊外著・梅窓散人筆、弘化二年乙巳写（一八四五）、〔写本〕　一冊（薄茶色、駒澤大学図書館蔵本）

【Q．黄檗宗・禅僧関連書籍など】（館備品資料番号：〇〇六六）

Q／〇〇一　『昨非集　（完）』大典顕常、植村藤右衛門ほか、宝暦十一年刊（一七六一）　一冊（茶色、個人蔵本）

Q／〇〇二　『魯寮尺牘　上・下』大潮禅師、田中甚兵衛ほか、宝暦十一年刊（一七六一）　二冊（茶色、黄檗文庫蔵本）

Q／〇〇三　『介石稿抄』終南禅師、須原屋茂兵衛、安永六年刊（一八五九）　一冊（茶色）

Q／〇〇四　『燕石詩稿』大渓禅師、元文二年丁巳序（一七三七）、昭和二年書写（一九二七）、〔写本〕　一冊（茶色）

Q／〇〇五　『天山詩稿』大渓禅師、寛保元年序（一七四一）、〔写本〕　一冊（茶色、黄檗文庫蔵本）

Q／〇〇六　『雪峰大渓禅師遺稿』大渓禅師、昭和二年書写（一九二七）、〔写本〕　一冊（茶色、黄檗文庫蔵本）

Q／〇〇七　『緇林の文豪　聞渓和尚／雑稿』小川千巌著、〔自筆稿本〕　二冊（緑色、個人蔵本）

【R．辞書類・随筆・文学・その他】（館備品資料番号：〇〇六七）

R／〇〇一　『貝原養生訓　付録』（抄本）杉本義篤、多田勘兵衛、正徳三年成、文化九年刊（一八一二）　一冊（黄土色、谷村氏蔵本）

R／〇〇二　『養生法　全』松本良順著・山内豊城注、島村利助、元治元年跋（一八六四）　一冊（薄青色、谷村氏蔵本）

R／〇〇三　『売茶翁　祇園梶　復讐煎茶濫触　全』山東京伝、仙鶴堂、文化二年刊（一八〇五）　一冊（暗黄土色、個人蔵本）

2．マイクロフィルム焼付製本類

【S．煎茶書など】（館備品資料番号：〇〇六八）

S／〇〇一　『喫茗新語　一・二・三、四・五・六、附言』来化亭隠士、天保八年叙（一八三七）　三冊（内閣文庫蔵本・浅草文庫）

S／〇〇二　『煎茶纂要』塚原簡子輯、〔稿本〕　一冊（東京都立中央図書館蔵本・加賀文庫）

S／〇〇三　『茶　曽占春稿本』　一冊（東京都立中央図書館蔵本・加賀文庫）

T．茗讌図録など】（館備品資料番号：〇〇六九）

T／〇〇一　『茗讌品目』山本梅逸、嘉永五年壬子序（一八五二）　一冊（東京都立中央図書館蔵本・加賀文庫）

T／〇〇二　『茶郷一楽　上・下』森本為善、慶応元年跋（一八六五）　一冊（東京都立中央図書館蔵本・加賀文庫）

T／〇〇三　『熊谷醉香居士追福　書画展観録』奥蘭田、明治八年乙亥序（一八七五）一冊（東京都立中央図書館蔵本・加賀文庫）

T／〇〇四　『舟皐山房小集雑記』三木真平ほか〔幹事〕、明治十三年庚辰題字（一八八〇）　一冊（東京都立中央図書館蔵本・加賀文庫）

T／〇〇五　『青眼小録』益清亭ほか〔幹事〕、明治十三年刊（一八八〇）　一冊（東京都立中央図書館蔵本・加賀文庫）

T／〇〇六　『清娯軒茶筵図録　完』山水居主人、明治十六年刊（一八八三）一冊（東京都立中央図書館蔵本・加賀文庫）

T／〇〇七　『招鶴亭茗醼図録　全』明治十九年丙戌序（一八八六）　一冊（東京都立中央図書館蔵本・加賀文庫）

T／〇〇八　『楳仙先生古稀筵展観録　全』明治十九年丙戌跋（一八八六）　一冊（東京都立中央図書館蔵本・加賀文庫）

T／〇〇九　『信濃清娯欣賞録　全』小宮山石仏、明治二八年記（一八九五）一冊（東京都立中央図書館蔵本・加賀文庫）

T／〇一〇　『老古茗筵図録』中井寅蔵、明治二九年刊（一八九六）　一冊（東京都立中央図書館蔵本・加賀文庫）

T／〇一一　『万翁華甲醼誌』市河三陽ほか、明治三一年序（一八九八）　一冊（東京都立中央図書館蔵本・加賀文庫）

T／〇一二　『長春堂新居茗筵録』長春堂主人、大正三年甲寅序（一九一四）一冊（東京都立中央図書館蔵本・加賀文庫）

T／〇一三　『七石亭茗筵録』湯川玄洋、大正五年刊（一九一六）　一冊（東京都立中央図書館蔵本・加賀文庫）

3．煎茶関連書籍等コピー類

【U．茶書・文人・禅僧・その他】（館備品資料番号：〇〇七〇）

U／〇〇一　『自弁茶略　全』街頭道者嵐翠、片埜東四郎、享和三年癸亥刊（一八〇三）　一冊分（京都大学図書館蔵本）

U／〇〇二　『浪華煎茶大人集』天保六年跋（一八三五）　一冊分（大阪府立中之島図書館蔵本）

U／〇〇三　『高翁小伝　草稿　乾・坤』眠雲逸人、戊申跋（一八四八／一九〇八）一冊分（国会図書館蔵本）

U／〇〇四　『梅厓先生伝　完』笛村芳橘撰、明治二三年庚寅刊（一八九〇）一冊分

U／〇〇五　『直入先生系伝』奥田天門編、辻本朔治郎、明治四一年刊（一九〇八）一冊分

U／〇〇六　『西溟余稿　文部　一・二・三』大潮禅師、田中甚兵衛ほか、延享五年刊（一七四八）　三冊分（駒澤大学図書館蔵本）

U／〇〇七　『西溟余稿　詩部　上・下』大潮禅師、〔宝暦八年刊、下巻二九頁以降欠〕　二冊分（駒澤大学図書館蔵本）

U／〇〇八　『西溟余稿　詩部　上・下』大潮禅師、田中甚兵衛ほか、宝暦八年刊（一七五八）、〔下巻欠落箇所：萬福寺文化殿蔵本で補填〕　二冊分（長崎県立図書館蔵本・渡辺文庫）

U／〇〇九　『瓊浦游艸』大潮禅師　一冊分（長崎県立長崎図書館蔵本）

U／〇一〇　『八僊卓燕式記』渋谷武十郎、和泉屋文助、宝暦十一年辛巳序（一七六一）　一冊分（大阪府立中之島図書館蔵本）

U／〇一一　『五渓集』柴山常名、〔自筆稿本〕　一冊分

U／〇一二　『売茶翁詩集　翁所自録』売茶翁高遊外筆、〔写本〕　一帖分（個人蔵本）

U／〇一三　『売茶翁画像百幅下絵』田能村直入筆、〔下絵〕　八二図分（個人蔵品）

4．写真など（館備品資料番号：〇〇七一）

〇〇一　ガラス乾板・ネガフィルムなど　一括

〇〇二　焼付け　一括

5．ノート類・その他資料類（館備品資料番号：〇〇七二）

〇〇一　煎茶関連ノート類　一括

〇〇二　その他資料類（帳面類・小印刷物・書付・文書等コピーなど）　一括

以上